

史跡 中里貝塚

保存活用計画（案）



2020

東京都北区教育委員会

史跡 中里貝塚

保存活用計画（案）

（中表紙）

表紙写真 中里貝塚史跡指定地（現. 上中里 2 丁目広場）の貝層断面

発掘された調査内部の底から、見上げるようにして撮影した写真。壁面に白く見えているものはすべて貝殻で、マガキとハマグリが累々と積み重なっている様子がよくわかる。

序 文

中里貝塚は江戸庶民にもその存在が知られ、明治時代には沖積地に立地する大型貝塚として学術的に公表されました。考古学研究の黎明期に学界では中里貝塚の性格について大いに議論されましたが、やがて鉄道敷設や市街化とともに忘れられていきました。中里貝塚が再び脚光を浴びることになったのは、平成8(1996)年の発掘調査でした。出土したハマグリとマガキだけの厚い貝層や貝の処理施設などは、縄文時代に浜辺で行われていた生産活動を実証するものでした。

平成12(2000)年、縄文時代の生産や社会的分業、社会の仕組みを考える上で重要な遺跡であるとの理由から国史跡に指定されました。平成24(2012)年にも隣接地が追加指定されています。平成8年の調査から20年が経過し、中里貝塚の歴史的価値を再評価して広く周知するため、平成30(2018)年3月には『史跡中里貝塚総括報告書』を刊行しました。

史跡指定地は2か所に分かれ、「上中里2丁目広場」の遊び場と暫定的に整備された「中里貝塚史跡広場」になっていますが、史跡として十分な整備活用は図られていません。そこで、中里貝塚を適切に保存しながら将来に亘ってその価値を確実に継承し、史跡を活かしたまちづくりを推進していくため、保存活用計画を策定することになりました。

本計画では、保存活用に向けた基本方針のもと史跡指定地と北区飛鳥山博物館を一体的に活用し、歴史的・文化的資源として情報発信を行い、地域の絆づくりや賑わい創出の拠点としての活用を目指します。

最後になりますが、計画策定にあたりましては、中里貝塚保存活用計画策定委員会の委員各位、文化庁・東京都教育庁からご指導、ご助言を賜りました。また、ワークショップなど地域の皆様にも多大なご協力をいただきました。あらためて深く感謝申し上げます。

令和2(2020)年3月

東京都北区教育委員会

例 言

1. 本書は、東京都北区上中里二丁目に所在する「史跡中里貝塚（しせきなかざとかいづか）」の保存活用計画書である。
2. この保存活用計画策定事業は、東京都北区教育委員会が主体となり平成 29 年度に始まり、平成 30 年度・令和元年度には国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金の交付を受けて計 3 か年にわたり実施した。
3. 本計画書は、「東京都北区中里貝塚保存活用計画策定委員会」（阿部芳郎委員長）を開催して協議された内容をもとに、事務局である東京都北区教育委員会が策定した。
4. 本計画策定に関わる事務は、東京都北区教育委員会事務局教育振興部飛鳥山博物館が担当し、関連する支援業務は株式会社イビソクに委託した。
5. 本計画の策定にあたっては、文化庁文化財第二課・東京都教育庁地域教育支援部管理課の指導・助言を得た。また、下記の諸機関・諸氏のご協力を賜った。記して謝意を表する（敬称略）。
綾瀬市教育委員会、上高津貝塚ふるさと歴史の広場、千葉市立加曽利貝塚博物館、西東京市教育委員会、東村山ふるさと歴史館、南アルプス市教育委員会、井上洋一、亀井翼、亀田直美、小滝勉、佐藤洋、塩谷修、千葉敏朗、中山誠二、保阪太一

目 次

第1章 保存活用計画策定の沿革・目的

| | |
|--------------------------|---|
| 第1節 計画策定の沿革 | 1 |
| 第2節 計画策定の目的 | 1 |
| 第3節 計画の対象範囲 | 2 |
| 第4節 委員会等の設置と経緯 | 2 |
| (1) 中里貝塚保存活用計画策定委員会 | 2 |
| (2) 国史跡中里貝塚保存活用計画策定庁内連絡会 | 6 |
| (3) 中里貝塚ワークショップ | 7 |
| 第5節 他の計画との関係 | 8 |

第2章 史跡中里貝塚の概要

| | |
|--------------------|----|
| 第1節 史跡指定に至る経緯 | 14 |
| 第2節 史跡指定の状況 | 15 |
| 第3節 中里貝塚を取り巻く環境 | 16 |
| (1) 自然的環境 | 16 |
| (2) 歴史的環境 | 18 |
| (3) 社会的環境 | 24 |
| 第4節 中里貝塚の調査成果 | 25 |
| (1) 調査研究略史 | 25 |
| (2) 調査の概要 | 27 |
| 第5節 中里貝塚の歴史的価値 | 33 |
| (1) 特化した貝類利用 | 33 |
| (2) 専門的な貝加工 | 34 |
| (3) 貝塚形成と生産者集団 | 35 |
| (4) 内陸部集落に供給するシステム | 35 |
| 第6節 史跡指定地の状況 | 38 |
| (1) 法規制 | 38 |
| (2) 土地所有状況・公有化の経緯 | 43 |

第3章 中里貝塚の本質的価値

| | |
|----------------------|----|
| 第1節 史跡の本質的価値 | 44 |
| 第2節 本質的価値を構成する要素 | 46 |
| 第3節 その他の諸要素 | 47 |
| 第4節 指定地の周辺地域を構成する諸要素 | 50 |
| 第5節 史跡を構成する諸要素の概要 | 51 |
| (1) 史跡指定地内 | 51 |
| (2) 史跡指定地外 | 51 |

第4章 現状と課題

| | |
|-----------------|----|
| 第1節 保存管理の現状と課題 | 52 |
| 第2節 活用の現状と課題 | 52 |
| 第3節 整備の現状と課題 | 55 |
| 第4節 運営・体制の現状と課題 | 56 |

| | |
|----------------------------|----|
| 第5章 保存・活用に向けた基本方針（大綱） | |
| （1） 保存管理の方針 | 58 |
| （2） 活用の方針 | 58 |
| （3） 整備の方針 | 58 |
| （4） 運営・体制の方針 | 58 |
| 第6章 保存管理計画 | |
| 第1節 保存管理の方向性 | 60 |
| 第2節 保存管理の方法 | 60 |
| 第3節 現状変更及び保存に影響を及ぼす行為の取扱基準 | 62 |
| （1） 基本原則 | 62 |
| （2） 現状変更等の許可申請区分 | 62 |
| 第4節 指定地外の保存管理の方法 | 64 |
| 第5節 追加指定の考え方 | 66 |
| 第7章 活用計画 | |
| 第1節 活用の方向性 | 67 |
| 第2節 活用の方法 | 67 |
| （1） 3種の活用の柱 | 68 |
| （2） 3つのエリアでの活用例 | 70 |
| 第8章 整備計画 | |
| 第1節 整備の方向性 | 71 |
| 第2節 整備の方法 | 71 |
| 第3節 事業計画 | 72 |
| 第9章 運営・体制の整備 | |
| 第1節 運営・体制の方向性 | 73 |
| 第2節 運営・体制の方法 | 73 |
| 第10章 施策の実施計画の策定・実施 | |
| 第1節 短期的な取り組み | 74 |
| 第2節 中期的な取り組み | 74 |
| 第3節 長期的な取り組み | 75 |
| 第11章 経過観察 | |
| 第1節 経過観察の方向性 | 76 |
| 第2節 経過観察の方法 | 76 |
| 第3節 点検・検証結果の反映 | 76 |
| 参考文献リスト | 79 |
| 卷末資料 | |
| 1. 指定説明文 | 80 |
| 2. 文化財関連法規 | 81 |

第1章 保存活用計画策定の沿革・目的

第1節 計画策定の沿革

東京都北区に所在する中里貝塚は、縄文時代中期から後期初頭にかけて当時の海岸線に形成された大型の貝塚である。平成8年（1996）の発掘調査が端緒となり、中里貝塚は縄文時代の生産や社会的分業、社会の仕組みを考える上で重要な遺跡であるとして、平成12年（2000）、国史跡に指定された。その後、史跡指定地の隣接地において範囲確認調査を実施したところ、2m以上の純貝層を検出したことから、関係機関と協議を進め、平成24年（2012）に追加指定を行い、遺跡の保護を図っている。

最初の史跡指定から20年近くが経過する中で、北区教育委員会は中里貝塚の歴史的価値を再評価し、その価値を広く周知することを目的として、平成29年度に『史跡中里貝塚 総括報告書』を刊行した。一方で、史跡指定地は「中里貝塚史跡広場」の暫定的な整備にとどまっており、十分な整備活用が図られていない状態であることから、中里貝塚の価値を高め、適切に保存・継承し、史跡を活かしたまちづくりを推進していくため、保存活用計画を策定することとなった。

第2節 計画策定の目的

本計画は、中里貝塚のこれまでの調査成果や現地の状況等を再確認することで、中里貝塚の本質的価値を明らかにし、それらの価値を適切に保存管理・活用していくための基本方針や方法等を定めることを目的とする。

前述したように、中里貝塚は暫定的な広場整備にとどまっているため、現地で史跡を体感することが難しい状態となっている。また、中里貝塚について学ぶ機会が少ないため、区民の史跡に対する認知度が低い点なども課題の1つである。

これらの史跡をめぐる課題を整理し、社会情勢の変化や地域の意見を反映させながら、保存活用計画を策定することとする。



第1図 史跡位置図



第2図 計画の対象範囲（『史跡中里貝塚 総括報告書』p. 119 を改変）

第3節 計画の対象範囲

中里貝塚は、東京都北区上中里二丁目に位置する。JR京浜東北線・新幹線車両基地と尾久操車場、宇都宮・高崎線などの線路群に挟まれる形となっている。貝層の分布は、当時の海岸線に形成された大型の貝塚であるため東西に長く、貝層の中心部から北側に離れると貝層の堆積が徐々に薄くなっていく。現在史跡指定されている範囲は、中里貝塚全体の一部であり、その周囲の貝層の保護も図る必要がある。よって、本計画の対象範囲は、史跡指定地及びその周辺地域とする。具体的な範囲設定と地区区分については、「第6章 保存管理計画」（p. 60）において示すものとする。

第4節 委員会等の設置と経緯

（1）中里貝塚保存活用計画策定委員会

本計画の策定にあたり、「中里貝塚保存活用計画策定委員会（以下、「委員会」という）」を設置し、史跡の本質的価値の整理や保存管理・整備活用の方性等の検討を行った。委員会は各分野の専門家や地元自治会、公募区民、関係団体や関係機関の代表者から構成され、文化庁文化財第二課、東京都教育庁地域教育支援部管理課もオブザーバーとして出席し、指導や助言を受けた。委員会の構成と経過は次の通りである。

①委員会の構成

委員

| 氏名 | 所属名等 | 備考 |
|---------|-----------------|-----------|
| 阿部 芳郎 | 明治大学教授（考古学） | |
| 石川 日出志 | 明治大学教授（考古学） | |
| 吉村 晶子 | 千葉工業大学教授（都市計画） | 平成29・30年度 |
| | 名城大学教授（都市計画） | 令和元年度 |
| 松本 晴光 | 昭和町地区自治会連合会会長 | |
| 議波 壽男 | 昭和町地区自治会連合会監事 | （松本会長代理） |
| 山田 和夫 | 上中里貝塚町会会長 | |
| 堀江 正郎 | 北区観光ボランティアガイド代表 | |
| 佐々木 富美子 | 公募（北区在住） | |
| 山口 宗彦 | 区立滝野川第五小学校長 | |

オブザーバー

| | | |
|--------|------------------------|--------------|
| 山下 信一郎 | 文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官 | 平成29・30年度 |
| 野木 雄大 | 文化庁文化財第二課（※）文部科学技官 | 平成30年度・令和元年度 |
| 伊藤 敏行 | 東京都教育庁地域教育支援部管理課統括課長代理 | |

※文化庁の組織改編に伴い変更（文化財部記念物課→文化財第二課）

北区関係理事者

| | | |
|-------|------------------|--------------|
| 筒井 久子 | 政策経営部企画課長 | |
| 雲出 直子 | 政策経営部広報課長 | 平成29・30年度 |
| 古平 聡 | 同上 | 令和元年度 |
| 馬場 秀和 | 地域振興部副参事（観光振興担当） | |
| 寺田 雅夫 | まちづくり部都市計画課長 | 平成29年度 |
| 丸本 秀昭 | 同上 | 平成30年度・令和元年度 |
| 佐藤 信夫 | 土木部土木政策課長 | 平成29年度 |
| 岩本 憲文 | 同上 | 平成30年度・令和元年度 |
| 佐野 正徳 | 土木部道路公園課長 | 平成29・30年度 |
| 杉戸 代作 | 同上 | 令和元年度 |

教育委員会

| | | |
|--------|-----------------------|--------------|
| 田草川 昭夫 | 教育振興部長 | 平成29・30年度 |
| 小野村 弘幸 | 同上 | 令和元年度 |
| 山本 三雄 | 教育振興部飛鳥山博物館長 | 平成29年度 |
| 野尻 浩行 | 同上 | 平成30年度・令和元年度 |
| 鈴木 直人 | 教育振興部飛鳥山博物館 事業係長（学芸員） | |
| 中島 広頭 | 教育振興部飛鳥山博物館 事業係（学芸員） | |
| 牛山 英昭 | 同上 | |
| 安武 由利子 | 同上 | |
| 田代 清美 | 教育振興部飛鳥山博物館 事業係 | 平成29年度 |
| 谷 木綿子 | 同上 | 平成30年度・令和元年度 |

②委員会の経過

第1回委員会：平成30年（2018）1月19日

- ・委員長選任
- ・計画策定の目的
- ・『総括報告書』について
- ・史跡の現状と課題

第2回委員会：平成30年（2018）3月9日

- ・現地視察
- ・史跡の現状と課題
- ・史跡の構成要素

第3回委員会：平成30年（2018）5月11日

- ・史跡の構成要素と地区区分
- ・保存活用の基本方針

第4回委員会：平成30年（2018）7月20日

- ・保存活用計画策定スケジュールの変更について
- ・本質的価値の再検討

第5回委員会：平成30年（2018）9月21日

- ・計画書構成案について
- ・本質的価値ほかの再検討
- ・保存活用の基本的な指針（大綱）

第6回委員会：平成30年（2018）11月30日

- ・計画書構成案について
- ・史跡の構成要素について
- ・整備活用に関する方向性について

第7回委員会：平成31年（2019）2月12日

- ・保存管理計画案について
- ・活用計画および整備計画案について

第8回委員会：令和元年（2019）6月10日

- ・保存・活用に向けた基本方針（大綱）および保存管理計画について
- ・活用計画および整備計画案について
- ・運営体制の整備および経過観察案について

第9回委員会：令和元年（2019）8月27日

- ・第5章 保存・活用に向けた基本方針（大綱）および第6章 保存管理計画について
- ・第7章 活用計画および第8章 整備計画案について
- ・第9章 運営体制の整備および第10章 施策の実施計画の策定・実施、第11章 経過観察について

第10回委員会：令和元年（2019）10月31日

- ・史跡中里貝塚保存活用計画書全体の確認・検討

第11回委員会：令和2年（2020）2月10日

- ・パブリックコメントの結果について
- ・計画書の最終確認・検討について



写真1 委員会の開催風景

(2) 国史跡中里貝塚保存活用計画策定庁内連絡会

中里貝塚保存活用計画の策定に向け、関係部局における連絡調整を行うため、「国史跡中里貝塚保存活用計画策定庁内連絡会」を設置し、開催した。委員は次の職にある者をもって構成した。

① 庁内連絡会の構成

| | | |
|-----|--------------------|---------------------------------|
| 会 長 | 教育振興部長 | 田草川 昭夫（平成30年度） 小野村 弘幸（令和元年度） |
| 委 員 | 政策経営部企画課長 | 筒井 久子 |
| 委 員 | 政策経営部財政課長 | 小林 誠 |
| 委 員 | 政策経営部広報課長 | 雲出 直子（平成30年度） 古平 聡（令和元年度） |
| 委 員 | 地域振興部地域振興課長 | 遠藤 洋子（平成30年度） 関谷 幸子（令和元年度） |
| 委 員 | 地域振興部産業振興課長 | 馬場 秀和 |
| 委 員 | まちづくり部都市計画課長 | 丸本 秀昭 |
| 委 員 | 土木部参事（土木政策課長事務取扱） | 岩本 憲文 |
| 委 員 | 土木部道路公園課長 | 佐野 正徳（平成30年度） 杉戸 代作（令和元年度） |
| 委 員 | 教育振興部教育政策課長 | 松村 誠司 |
| 委 員 | 教育振興部生涯学習・学校地域連携課長 | 江田 譲 |
| 委 員 | 教育振興部教育指導課長 | 山崎 隆 |
| 委 員 | 教育振興部飛鳥山博物館長 | 野尻 浩行 |

② 庁内連絡会の経過

第1回連絡会：平成30年（2018）10月4日

- ・会長・副会長選任、これまでの経緯と課題
- ・第1回～第5回中里貝塚保存活用計画策定委員会について

第2回連絡会：平成30年（2018）11月14日

- ・第6回中里貝塚保存活用計画策定委員会について

第3回連絡会：平成31年（2019）1月31日

- ・第7回中里貝塚保存活用計画策定委員会について

第4回連絡会：令和元年（2019）5月28日

- ・第8回中里貝塚保存活用計画策定委員会について

第5回連絡会：令和元年（2019）8月22日

- ・第9回中里貝塚保存活用計画策定委員会について

第6回連絡会：令和元年（2019）10月18日

- ・第10回中里貝塚保存活用計画策定委員会について

(3) 中里貝塚ワークショップ

委員会での保存活用計画策定と並行して、公募区民によるワークショップを実施した。これは、史跡の保存活用に向けて、地域住民の参画が欠かせないことから、中里貝塚の整備・活用や史跡を活かしたまちづくりについて広く意見を収集し、計画に反映させることで、より実行性のある保存活用計画を作成することを目的としている。ワークショップの経過は以下の通りである。

ワークショップの経過

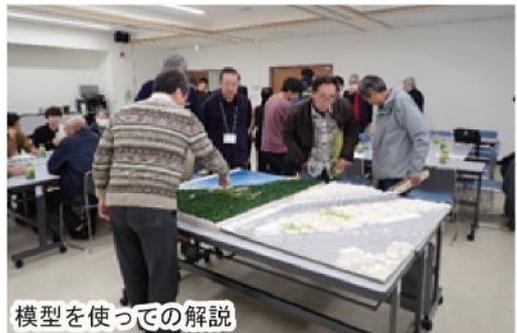
第1回ワークショップ：平成30年（2018）12月16日

- ・中里貝塚はどういった史跡か
- ・意見交換「みんなで話そう中里貝塚のこと」
- ・アンケート調査実施



第2回ワークショップ：平成31年（2019）2月17日

- ・他史跡の事例紹介
- ・意見交換「国史跡中里貝塚の活用」



第3回ワークショップ：令和元年（2019）5月26日

- ・今後の取り組み内容について
- ・意見交換「中里貝塚のPR活動、子どもの参画」

第4回ワークショップ：令和元年（2019）8月24日

- ・整備事例の見学
下宅部遺跡(東村山市)、下野谷遺跡(西東京市)



第5回ワークショップ：令和元年（2019）10月20日

- ・第4回ワークショップの報告
- ・意見交換「第4回ワークショップを踏まえた国史跡中里貝塚の活用」
- ・第1回～第5回ワークショップのまとめ



写真2 ワークショップの開催風景

第5節 他の計画との関係

北区では、区政の基本方針を示した『北区基本計画 2020』に基づき、魅力あるまちづくりを進めている。本保存活用計画は、『北区基本計画 2020』をはじめとした教育・観光・環境・景観等の関連計画とも密接に関わってくることから、諸計画と整合性を図る必要がある。

以下に、主な上位計画・関連計画の概要を整理する。

『北区基本計画 2020』 (令和2年3月)

北区は、『北区基本構想』に掲げる北区の将来像「ともにづくり未来につなぐ ときめきのまち一人と水とみどりの美しいふるさと北区」を実現するための長期総合計画として、平成27年3月に『北区基本計画 2015』を策定し、取組みを進めてきた。時代が「平成」から「令和」へと移り変わる中で、社会情勢やライフスタイルも大きく変化していることから、将来を見据えた施策の方向を示し、「新たな時代に 未来への希望を紡ぐ ふるさと北区」の実現に向けて、計画期間を令和2年度から令和11年度までとした『北区基本計画 2020』を策定する。

北区基本構想では、「健やかに安心してらせるまちづくり」、「一人ひとりがいきいきと活動するにぎわいのあるまちづくり」、「安全で快適なうるおいのあるまちづくり」の3つの基本目標と、25の施策が示された。25の施策のうち、(2-1) 地域産業の活性化、(2-3) 個性豊かな地域文化の創造、(2-4) 生涯学習の推進、(3-6) うるおいのある魅力的な都市空間の整備の4つが歴史や文化に関わるものとなっている。

『北区教育・子ども大綱』 (令和元年11月)

「北区教育大綱」の策定から5年が経過し、平成28年度に教育委員会が教育振興部とこども未来部の二部制になったことを踏まえ、「北区教育大綱」を教育・学術及び文化振興に関するだけでなく、子育て分野の事業の指針となる新たな大綱「北区教育・子ども大綱」として令和元年11月に策定した。

『北区教育ビジョン 2020』 (令和2年3月)

『北区教育ビジョン 2020』は、今後5年間に重点的に取り組むべき学校教育分野、生涯学習分野の基本的な方向性と主な施策を示すものである。

『北区教育ビジョン 2020』では、施策展開の3つの柱と14の取組の方向を整理しており、「Ⅲ 学び合う絆をつくる」の柱において、「14 文化・芸術活動を振興する」が、歴史や文化に関わる取組の方向となっており、その重点事業の1つに「「史跡のまち・北区」のPR」が位置づけている。

| 取組の方向 | 主な施策 | |
|-----------------|---|--|
| 14 文化・芸術活動を振興する | (44) ふるさと北区への愛着を深める事業の推進 (45) 文化財の保護・活用と保存・継承 (46) 魅力的な文化・芸術活動の推進 | |
| 事業群（重点事業） | 事業群（推進事業） | |
| 「史跡のまち・北区」のPR | 文化財を活用したふるさと学習事業 飛鳥山博物館の講座・企画展の充実 北区の部屋事業 伝統芸能の継承者の育成支援 | 北区文化振興財団との連携 連合文化行事活動の推進 子どもかがやき顕彰 |

14 文化・芸術活動を振興する

重点事業：「史跡のまち・北区」のPR

桐ヶ丘遺跡、十条台遺跡群などの埋蔵文化財包蔵地や中里貝塚など、北区に多く存在する史跡について、AR（拡張現実）等を整備します。

現地で史跡に関する画像や説明に触れながら史跡を実感できるよう工夫を施すなど、広く「史跡のまち・北区」のPRを推進していきます。

また、貝層を保存するため地下に埋もれた状態で暫定整備している中里貝塚については、「史跡中里貝塚保存活用計画」に基づき整備基本計画を策定し、史跡広場の整備など環境の整備を進めていきます。

| | 令和2年度 | 令和3年度 | 令和4年度 | 令和5年度 | 令和6年度 |
|-----------------|-------|--------|-------|------------|---------|
| 計 画 | 推進 | —————→ | | | |
| (内訳) 史跡広場の整備 | 計画策定 | 設計 | 整備・完成 | 実施 | —————→ |
| 史跡の活用 | 検討 | —————→ | 準備 | 実施・普及啓発の検討 | 普及啓発の検討 |

【飛鳥山博物館】

推進事業：飛鳥山博物館の講座・企画展の充実

区内に多数ある有形無形の歴史的文化遺産を活用し、北区ならではの歴史、文化、自然の魅力を発信する企画展や、区内の各所にある文化財巡り、身近な地域の歴史を訪ねる講座の充実を図ります。

『北区シティプロモーション方針』（平成28年3月）

『北区シティプロモーション方針』は、ターゲットをより明確化し、北区内外への集中的、効果的な情報発信を強化するため策定された。北区の魅力を発信することで、イメージと知名度を

高める一方で、区民にあらためて北区の魅力を認識してもらい、「まち」に愛着を持ってもらうことを目指している。

北区シティプロモーションの基本的な視点は、以下の3つである。

1. 戦略的・効果的な情報発信

情報の発信にあたっては、北区の個性や魅力の認識・認知を高めていくため、様々な情報を提供していくことはもとより、情報の受け手が他者にも伝えたいくなるような伝え方や届け方を意識し、発信する情報がより効果的なものとなるよう戦略的な視点を持って情報発信に取り組む。

2. 個性や魅力等の伝播

発信する情報は、わかりやすさ、印象の残りやすさ、人から人への伝わりやすさなど、北区の個性や魅力の認知のしやすさや北区内外への広がりを意識した視点を持って取り組む。

3. 情報発信の多様性への対応と活用

情報発信はこれまで、北区ニュースやホームページ、チラシやポスターなどの紙媒体などによる北区から北区内外へ向けた発信やメディア等が中心であった。しかしながら、近年は、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス。コミュニティ型の Web サイト。）などを活用したインターネットでの情報の受発信が活発になるなど、情報発信の手段も多様化している。引き続き、メディアを媒介した情報発信についてもその量や幅の拡大に努めながら、SNSなどの多様化する発信媒体を有効に活用し、よりターゲットに伝わる取組みを推進していく。

『北区観光振興プラン』（平成27年3月）

『北区観光振興プラン』は、北区の観光がめざすべき方向性を明確にし、それを確実に実行していくための方策を位置づけたものである。歴史文化に関わるプロジェクトとして、「プロジェクト1：暮らしっくツアープロジェクト」を挙げている。北区には、地域に根付いた商店街や食、四季を感じられる豊かな自然、水辺、そして、先史～大正、昭和に至るまでの歴史など、暮らしに密着した資源、魅力が多く存在する。それらの資源については、観光資源としての認知度はまだ低いため、様々な視点でこれらの魅力を再編集し、多くの人を楽しめるツアーの開発を進めていくとしている。具体的な内容としては、北区民や北区の子どもたちに地域を理解してもらい、愛着を持ってもらうことを目的としたイベントやツアーの実施、広報などを検討しているほか、北区の既存のイベントや地域資源を組み合わせる観光ルートの開発、ツアーの企画なども検討している。

『北区都市計画マスタープラン2020』（令和2年度）

北区ではこれまでに「北区都市計画マスタープラン2000」、「北区都市計画マスタープラン2010」を策定し、都市づくり・まちづくりを進めてきた。現行計画から約10年、策定当初から約20年が経過し、この間の社会情勢の変化や東京都及び北区の上位関連計画の策定・改定に対応するた

め、全体の見直しを行い、「北区都市計画マスタープラン 2020」を策定する。

将来都市像として「人と人のつながりがあり、利便性とうるおいのある暮らし」を挙げており、北区全域の未来の暮らしのイメージとして、「駅を中心としたコンパクトで活動的な暮らし」、「誰もが憩えるうるおいとやすらぎのある暮らし」、「多様性を育む人と人のきずなのある暮らし」、「時代の変化に対応した安全・快適な社会基盤」の4つを示している。

分野別の都市づくりの方針においては、歴史文化に関わる基本的な考え方として「2 交流を育む魅力 水辺・みどり ⇄ 交流 ⇄ 歴史・文化・景観」を挙げており、人、まち、自然が交わり新たな魅力が創出されるまちを目標としている。主な施策として以下のものが挙げられる。

「水辺やみどりと結びついた地域の歴史や文化の継承」

- ・江戸時代から庶民に親しまれてきた飛鳥山公園、名主の滝公園、石神井川沿川の緑地などにおいて地域独自の文化的価値を育成する整備を進め、北区のまちの歴史・文化を継承します。
- ・寺社林や大径木など地域のシンボルとなるみどりは、保護樹木の指定などによる保全を促進し、みどりの文化資源として継承します。
- ・飛鳥山公園をはじめ、渋沢栄一翁にゆかりのある地を活かしたプロジェクトを推進し、北区における歴史的価値を発信・継承します。
- ・(仮称)芥川龍之介記念館の建設を契機として、歴史・文化に関する地域の資源と相互に連携した活用を進め、新たな価値として継承します。

地区別のまちづくりの方針においては、中里貝塚の位置する“滝野川東地区”の将来像を「地域に根付いた、鉄道を中心とした多様なにぎわいのあるまち「滝野川東」と設定している。また、取組方針の中で、「史跡を活かした環境づくりの推進」を挙げており、国史跡である中里貝塚を活かしたまちづくりを推進し、歴史と文化を感じられる市街地の形成を図るとしている。

『北区環境基本計画 2015』 (平成 27 年 1 月)

『北区環境基本計画 2015』は、環境の保全と創造に区民一人ひとり自覚を持って取り組み、それを支える仕組みが整っている、持続可能な北区の実現を目指すために策定された。

「自然環境共生都市～みんなが環境を考え・行動するまち～」を望ましい環境像として設定し、長期目標（10 年間）として「持続可能な環境共生都市実現に向け、地域のきずなづくりを推進する」を挙げている。基本目標は、①北区の環境を育むきずなづくり、②安全・安心な区民生活環境の確保、③みんなで目指す低炭素・循環型の北区、④区民と自然が共生できる仕組みづくり、の4つとなっている。

『北区緑の基本計画 2020』 (令和 2 年 3 月)

『緑の基本計画』は、緑地の保全や緑化の推進に関して、その将来像、目標、施策などを定めるものである。『北区緑の基本計画』は、前回の改定から 10 年がたち、北区基本計画などの改定と、近年の震災や多発する豪雨災害を契機とした防災機運の高まり、様々な環境問題に関する国際的

な動きの活発化を踏まえ、これまでの理念を基本としながら、生物多様性地域戦略の策定、新たな目標の検討、魅力ある公園の確保と充実、自然観察や環境学習の充実といった新たな課題に取り組むための指針として、『北区緑の基本計画』の改定を行った。

緑づくりの基本理念を「ひといきいき みどりいきいき 育てる つながる北区」と設定し、以下の6つの基本方針を挙げている。

- ①人と地球にやさしい緑づくり
- ②生きもののにぎわいのある緑づくり
- ③魅力ある公園やふれあえる緑づくり
- ④自然・文化を彩る緑づくり
- ⑤安全・安心を高める緑づくり
- ⑥参加・協カ・学びによる緑づくり

『北区景観づくり計画』（平成27年9月）

『北区景観づくり計画』は、基本理念を「歴史的文化の継承と新しい地域文化の創造」と定め、将来イメージは「“うるおい”と“ときめき”のまち」、「庶民的で住みよいまち」、「多様な個性が共存するいきいきとしたまち」としている。

そして、景観を構成する要素のうち「すぐれたものを“まもり、そだて”、足りないものを“つくり、おぎない”、阻害するものを“なおし、とりのぞく”」という視点で魅力ある景観まちづくりを進めていくことを基本姿勢としている。

地域ごとの特性・方針では、中里貝塚の位置する“上中里・遺跡かいわい”において、住宅、商業施設、工場などが共存する複合市街地の中で、車両センターや、車両センター脇の桜並木などが景観資源となっていることから、景観資源を活かし、緑化の推進を図るなど多様な用途が、まちなみに調和したみどり豊かな景観づくりを進めます、としている。また、隣接する“飛鳥山かいわい”において、江戸時代からの名所である飛鳥山公園の他、国立印刷局東京工場、滝野川公園など大規模な公共施設等や緑地が立地していることから、飛鳥山公園からの景観に配慮し、石神井川など周辺の景観資源とも一体となった景観づくりを進めるとしている。

第2章 史跡中里貝塚の概要

第1節 史跡指定に至る経緯

中里貝塚の貝殻が広い範囲に散布する様は江戸庶民の知るところであったが、遺跡として考察されるのは明治時代に入ってからである。明治19年(1886)に「中里村介塚」が発表されると台地上の貝塚と異なる中里貝塚は大いに注目され、議論の的になった。明治29年(1896)の報告を最後に議論は一定の終結を見せ、操車場の開設や市街化による急速な変貌とともに学界でも何時しか取り上げることはなくなっていた。

昭和50年代後半、中里貝塚への関心が否応なしでも高まる機会を迎えた。当時、大宮始発だった東北新幹線が上野へ乗入れることになり、中里貝塚の故地を斜めに通過する可能性が出てきたのである。計画線内は文化財保護法に言う「周知の埋蔵文化財包蔵地」に該当していなかったが、東京都教育委員会が当時の国鉄に文化財調査が必要な旨、協議を申し入れ、試掘調査を経て昭和58年(1983)に発掘調査を開始した。結果、丸木舟をはじめ多量の遺物や動植物遺存体が出土し、古環境復原に有効な低湿地情報が得られ、縄文時代の海岸線の変遷や活動の痕跡を確認することができた。平成2年(1990)には、区の特別養護老人ホーム(現・上中里つつじ荘)建設に先立ち発掘調査され、新幹線調査区の成果を補強する内容となったが、これらの調査では中里貝塚の再発見には至らなかった。

平成8年(1996)、北区は国鉄清算事業団から公園用地として土地を取得し、区教育委員会が公園整備に先立ち試掘調査を実施した。用地からは大量のハマグリとマガキの貝殻が出土し、漸く中里貝塚本体にメスが入ることになった。発掘調査の進捗に併せ現場視察した研究者は、一様にこれまでの貝塚の常識を覆す発見と評価を下した。10月以降、報道機関は大々的に取り上げ、11月13日には天皇皇后両陛下が足を運ばれ熱心に見学された。貝層や遺構は現状保存が調査中に確定し、養生して埋め戻された。同時に、史跡指定の気運が生まれていった。

発掘調査の成果に基づく文化庁の見解は将来、史跡指定が十分考えられるので、調査報告書の刊行、貝塚の分布範囲の確定、公園用地と同規模の公有地の確保、の3点について検討を求めるものであった。準工業地域の中里貝塚一帯は、工場と住宅が混在する民有地で、同規模の公有地を確保することは難題である。

解決策が見出せない状況が続くなか平成11年(1999)に急転する。公園用地の西側100m離れた場所で、工場移転に伴う跡地の敷地南側にマンション建設計画が浮上した。工場の解体後に行った試掘調査では予想以上に良好な貝層を検出し、発掘調査が必要と判断された。現地視察した文化庁調査官は、調査地点の性格を早急に究明することや調査区外の敷地北側についても貝層の分布範囲を把握するため確認調査を行なうよう指導された。発掘調査では貝層下の波食台に敷かれた木道など新たな遺構



第4図 平成8年の新聞報道など
(『中里貝塚－発掘調査概報－』より)

が発見され、公園用地同様に重要性が顕在化した。調査と併行し文化庁、東京都、北区は、史跡指定ならびに工場跡地の土地買上げについて協議を重ね、方針を確認した。そこで、区はマンションの建設計画中止と敷地全体の土地買上げを申入れ、建設断念と区への譲渡が決定した。終盤を迎えていた発掘作業は全面保存に方向転換し、養生して埋め戻された。

平成 12 年（2000）3 月、区は公園用地と土地買上げ用地の東西 2 箇所の史跡指定申請書を提出し、同年 5 月 19 日に文化財保護審議会から国史跡指定の答申を受けた。同年 9 月 6 日には官報告示により、貝塚では大森貝塚に次ぐ都内 2 番目の国史跡誕生となった。

平成 23 年（2011）、西側指定地の隣接地で工場跡地にマンション建設が計画され、確認調査が行われた。検出された 2 m を超す貝層の遺存状態を鑑み、文化庁、東京都と協議を経て、土地所有者へ追加指定と土地買上げを申入れ合意した。

平成 24 年（2012）1 月、区は追加指定の意見具申を申請し、同年 6 月 15 日に国の文化審議会は中里貝塚の追加指定を答申した。同年 9 月 19 日の官報告示により、史跡の追加指定が通知されている。

第 2 節 史跡指定の状況

- ・ 指定名称：史跡中里貝塚
- ・ 指定年月日（官報告示）
平成 12 年 9 月 6 日
平成 24 年 9 月 19 日…追加指定
- ・ 所在地：東京都北区上中里二丁目
(2-19, 2-20, 4-25, 8-3, 8-14,
9-13, 9-14, 8-4, 8-5, 9-3, 9-17)
- ・ 指定面積：6, 248. 49 m²

- ・ 指定理由：最大で厚さ 4.5 メートル以上の貝層が広がる、縄文時代の海浜低地に営まれた巨大な貝塚。焼石を投入して水を沸騰させて貝のむき身を取ったと考えられる土坑や焚き火跡、木道などが確認されている。生産された大量の干し貝は、内陸へ供給されたものと想定され、縄文時代の生産、社会的分業、社会の仕組みを考える上で重要である。
(※月刊文化財掲載の指定説明文は、巻末資料を参照。)



第 5 図 史跡指定地の地番図

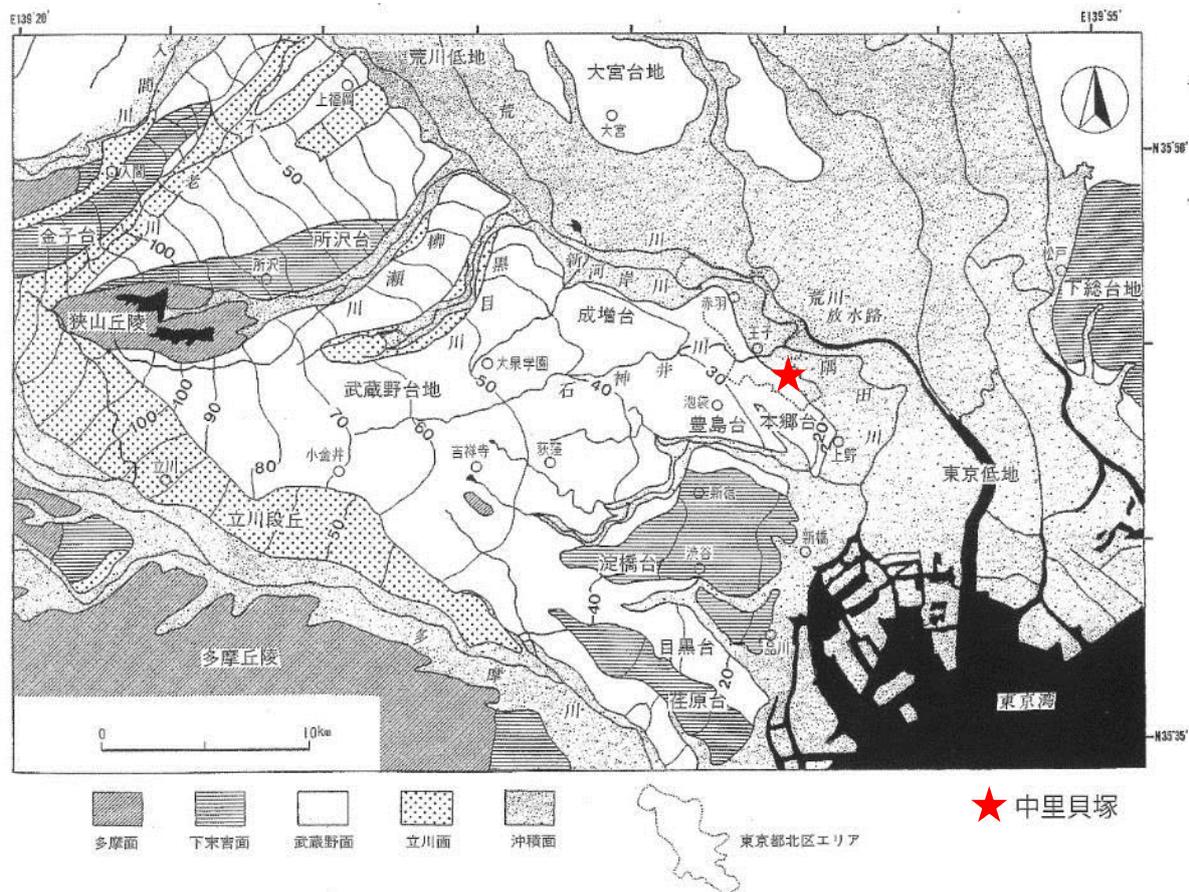
第3節 中里貝塚を取り巻く環境

(1) 自然的環境

東京都北区は、洪積台地の武蔵野台地およびそれに連なる沖積低地の東京低地という地勢からなり、武蔵野台地の北東端ならびに東京低地の西端に位置する。台地縁の崖線は北西から南東に走り、北区管内を東の低地側と西の台地側とに分けている。中里貝塚は崖線直下の沖積地に所在し、北西には武蔵野台地から東京低地に出たばかりの石神井川の流れが見られる（第6図）。

武蔵野台地は、古多摩川が形成した扇状地を起源とする段丘と下末吉海進最盛期（約12～13万年前）に形成された古東京湾が段丘化した地域などで構成されている。いずれも表層近くには関東ローム層が厚く堆積している。中里貝塚に隣接する台地上は標高25mを最高所とし、約6万年前に古荒川の河床として形成された層厚約6mの関東ローム層が堆積する本郷台と呼ばれる段丘であり、地形面的には武蔵野面（M2面）に相当する。本郷台は上野から赤羽まで急崖をなして東京低地に臨んでおり、王子より北では土地の名を冠して十条台・赤羽台とも呼ばれている。

東京低地は、武蔵野台地と対岸の下総台地の間に横たわる幅広い沖積地である。この地形は最終氷期極相期に古荒川と古中川が合流していた古東京川により浸食された大きな谷地形で、後氷期における縄文海進最盛期（6000～6500年前）に奥東京湾化した際に分厚な海成層（有楽町層）によって埋積されたものである。中里貝塚を含む北区管内における東京低地は右岸側に位置する。



第6図 東京付近の地形面区分（『史跡中里貝塚 総括報告書』p.5より引用）

東京低地の地表下-20~-30m付近には古東京川などによって形成された河岸段丘が埋没しており、王子埋没段丘と命名されている。また、地表下-5m付近には縄文海進最盛期に奥東京湾を形成した際、波の営力によって海食崖と化した武蔵野台地の縁が後退していく中で、その前面に武蔵野ローム層より数m下部に堆積している固結した東京層（下末吉海進最盛期における海成層）が剥き出しにされ、平坦なテーブル状に削り込まれた波食台を確認できる。東北新幹線上野乗入れ工事に伴う中里遺跡の調査では縄文海進最盛期の海食崖（写真3）、中里貝塚では生痕化石が無数にみられる波食台がそれぞれ検出されている。波食台は沖側に向かって緩やかに傾斜し、その幅は500m未満とされる。

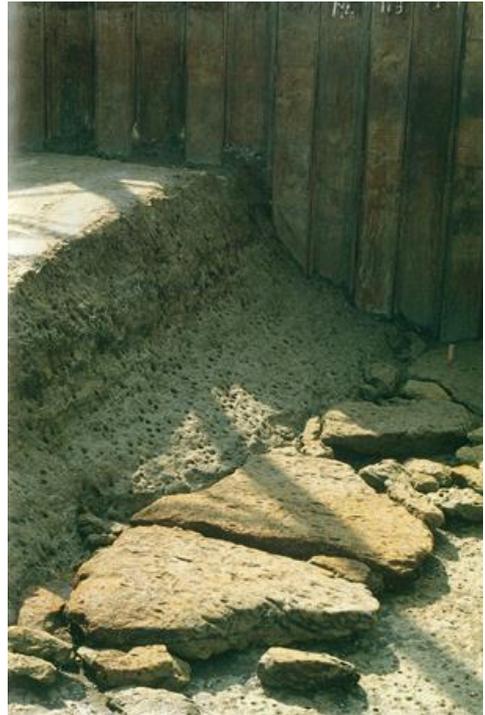
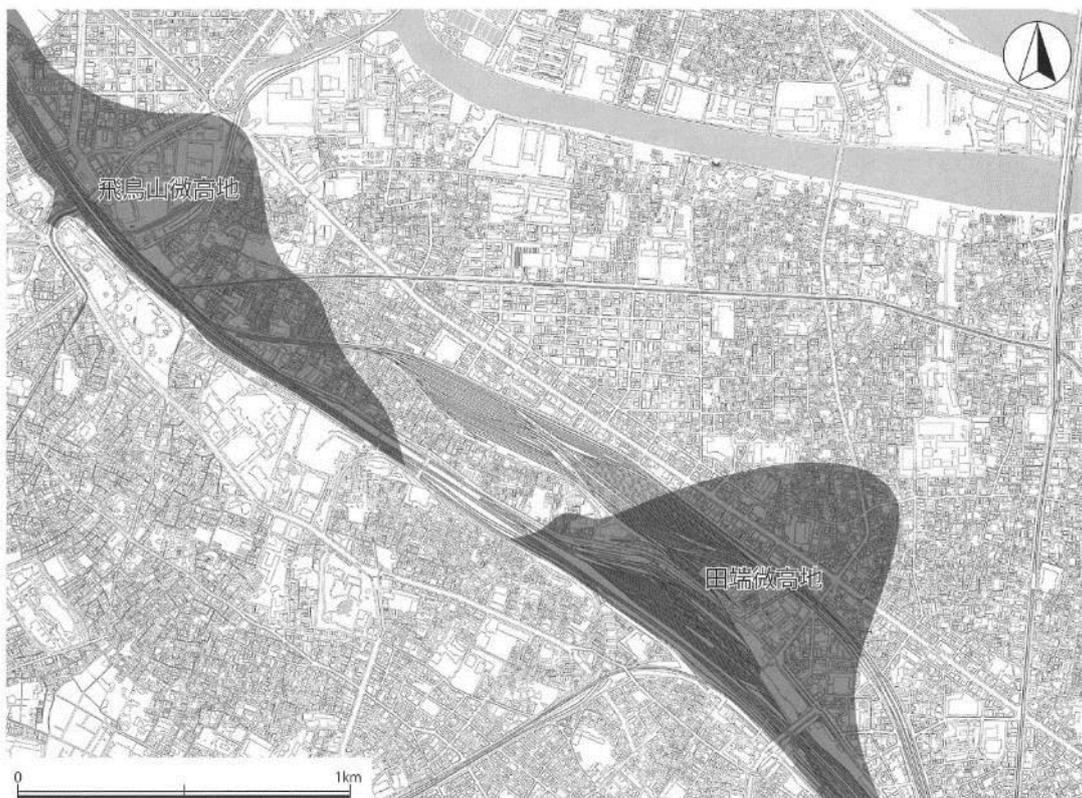


写真3 海食崖

中里貝塚が立地する本郷台直下の東京低地には砂洲が形成され、2つの微高地が見られる（第7図）。微高地はJ R王子駅東方には飛鳥山微高地、J R田端駅北西には田端微高地と呼ばれる高まりである。前者は台地を流下してきた石神井川が東京低地に出る付近に発達しており河成地形とも考えられるが、後者の成因については不明である。砂洲については海食崖が波の営力により浸食されていく過程で、崩された本



第7図 史跡周辺の地形図（『史跡中里貝塚 総括報告書』p.6より引用）

郷層や武蔵野・立川ローム層等が基本材料となり形作られていったとみられ、形成時期は縄文時代前期から中期前半にかけてと推定できる。そして、中里貝塚はこの田端微高地の北西側に隣接して分布していることが判明している。

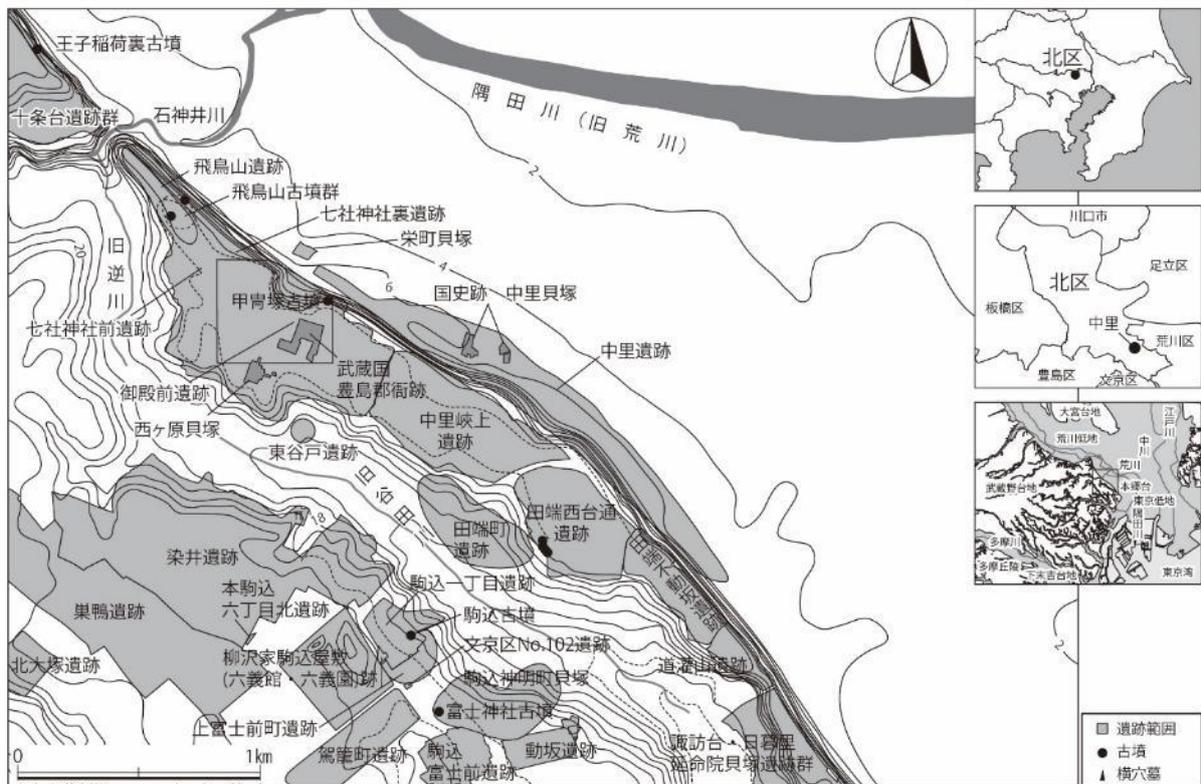
(2) 歴史的環境

①旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺物が出土している遺跡は、御殿前遺跡・飛鳥山遺跡・田端町遺跡・田端西台通遺跡が知られるが、密度からすれば希薄と言わざるを得ない。その中では御殿前遺跡の20箇所以上の遺物集中地点は群を抜いており、ナイフ形石器をはじめとする石器や火を焚いた痕跡を示す赤色化した礫（礫群）が集合して出土している。特筆されるのは有樋尖頭器と呼ばれる石器が発見され、有樋尖頭器の製作に関連する破片類も数多く出土しており、本郷台地上の貴重な事例である。

最終氷期を経て後氷期を迎えると、温暖化にともなう縄文海進が自然環境の変化をもたらせていった。縄文時代草創期では土器は発見されていないが、草創期に特徴的な石器が西ヶ原貝塚で出土している。早期では撚糸文土器や条痕文土器が飛鳥山遺跡・御殿前遺跡・中里遺跡などで出土しているが、遺構は御殿前遺跡で早期後半の炉穴3基が検出されているに過ぎない。

縄文海進最盛期の前期に至ると、海岸線を見下ろす台地上には、飛鳥山遺跡で関山式期の貝塚、七社神社前遺跡で黒浜式期の貝塚や諸磯式期の径200m規模の中央部に墓群を伴う環状集落などが営まれている。諸磯式期の墓塚から多量の浅鉢形土器や玦状耳飾が出土している。



第8図 中里貝塚と周辺の遺跡位置図（『史跡中里貝塚 総括報告書』p.13を改変）



写真4 丸木舟の検出状況

前期末から中期にかけては寒冷化による小海退が進み、海進最盛期の海岸線は徐々に後退していった。中里貝塚に隣接する中里遺跡では、中期前半と推定されている丸木舟（東京都指定有形文化財）が田端微高地の砂層中から発見され、出土した多量の煤けた縄文土器や土器片錘、焼礫群などは、海岸線での活発な活動を物語っている。彼ら縄文人の居住地は、勝坂式期の七社神社裏貝塚や大蔵省印刷局内貝塚、加曾利E式期の御殿前遺跡など、台地上の集落であった。漁期には海岸線に下り立ち、採貝や採藻、漁撈を行ったのであろう。



写真5 縄文時代の海岸線

後期には海退がさらに進み、中里遺跡では埋没林や泥炭層の堆積する湿地が確認されている。出土遺物は激減し、中期から後期初頭まで続いた海岸線での活動は終焉を迎える一方、台地上では学史上著名な西ヶ原貝塚（東京都指定史跡）が崖線の反対側の開析谷に面して馬蹄形貝塚を形成し、集落は晩期まで営々と存続する。近年、西ヶ原貝塚出土の土器から新たな製塩研究が進展している。ほかでは後期の称名寺式期から堀之内式期にかけて、御殿前遺跡・飛鳥山遺跡・七社神社裏遺跡・中里峽上遺跡などで竪穴建物や土坑から土器・石器・石棒・貝ブロックなどが出土しているが、その規模は大きくない。晩期の遺跡は、西ヶ原貝塚以外では中里貝塚から晩期の安行式土器が出土し興味深い。

②弥生・古墳時代

稲作が開始される弥生時代前期の明確な遺跡は詳らかではないが、中期に入ると集落遺跡が登場する。戦前に発見された飛鳥山遺跡出土の土器は、山内清男によって「飛鳥山式」という土器型式が設定され、南関東で本格的な稲作社会が形成され始めた段階に位置づけられている。中期後半の宮ノ台式期には飛鳥山遺跡に環濠集落が営まれ、環濠の外側に方形周溝墓群が検出されている。同時期の集落遺跡は、南から荒川区道灌山遺跡・飛鳥山遺跡・亀山遺跡・赤羽台遺跡が台地上の端部に連なって分布している。そのうち道灌山・飛鳥山・亀山の3遺跡は、東京低地を見下ろす環濠集落である。

後期には集落数が増えその規模も大きくなる。中里貝塚周辺の台地上には、御殿前遺跡・七社神社前遺跡・田端西台通遺跡・田端不動坂遺跡など連綿と集落遺跡が分布し、なかでも御殿前遺跡を中心とする西ヶ原の集落規模は格段に大きい。御殿前遺跡では後期前半に環濠集落が造られ、環濠外に方形周溝墓群を有している。後期後半の弥生町式期にはさらに竪穴建物数は増加し、方形周溝墓・土壇から鉄剣や鉄釧など副葬品が発見されている。また、田端西台通遺跡の方形周溝

墓からも鉄剣・鉄釧や多量のガラス小玉が出土しており特筆される。

後期末から古墳時代前期にかけては集落規模が縮小し、遺跡数も減少する。田端不動坂遺跡では、珠文鏡と呼ばれる小型の青銅鏡と勾玉・管玉・ガラス小玉など総数 140 点以上の玉類が土坑から一括出土し、4 世紀後半にムラの廃絶にあたって行われた祭祀に伴う宝器と考えられている（東京都指定有形文化財）。当該地では、次の 5 世紀代の集落遺跡は確認されていない。また、当該期の古墳も未検出である。

古墳時代後期では、小規模ながら集落と古墳が発掘調査されている。集落遺跡は中里峽上遺跡だけであり、古墳は飛鳥山古墳群と田端西台通古墳群の 2 つの円墳群があげられる。集落の造営年代と古墳の築造年代は、いずれも 6 世紀末から 7 世紀前半にかけてであり、古墳の埋葬主体部が確認されたのは飛鳥山 1 号墳のみである。

③奈良・平安時代～中世・近世・近代

奈良時代直前の 7 世紀後半、御殿前遺跡一帯には武蔵国豊島郡衙が創建される。豊島郡衙は、平安時代前期の 9 世紀後半まで 200 年近く継続的に造営された古代律令期の地方官衙である。これまでの調査で郡庁や正倉院、館などの諸施設が発見されており、有数の郡衙遺跡として著名である。昭和 58 年に豊島郡衙が初めて発見された調査地点（現・北区防災センター、滝野川体育館、滝野川消防署）は、北区史跡に指定されている。また、郡衙の至近には中里峽上遺跡・田端西台通遺跡・田端不動坂遺跡の律令集落があり、郡衙の造営期間にほぼ併行する。田端西台通遺跡では、和同開珎が 1 点出土している。

豊島郡衙や集落遺跡が終焉を迎えた後の古代末期に相当する遺跡は明確ではないが、11 世紀になると豊島郡を支配する中世領主・豊島氏が豊島郡衙の跡地周辺に本拠をおき、鎌倉時代へと移る。平塚神社周辺の台地上には、太田道灌が文明 9 年（1477）に落城させた豊島氏の居城・平塚城が築城されたと伝えるが、中世の溝址や地下式坑、板碑など大規模な発掘調査で検出されているものの城郭の実態は解明されていない。なお、崖線下の中里遺跡で出土した青磁・白磁など舶載磁器は、豊島氏を筆頭とする武士たちの存在を想像させる資料となっている。

戦国時代が終わり江戸時代になると、徳川将軍家の鷹場が設置された。御殿前遺跡の「御殿前」は小名であり、元は鷹狩の際に使用された御殿を意味するものである。また、飛鳥山が江戸の名所となったのは八代将軍徳川吉宗の桜植樹によることは良く知られ、整備された街道の日光御成道に西ヶ原一里塚（国史跡）が置かれた。王子・飛鳥山・滝野川は日本橋から約 2 里の距離にあり、江戸市中から日帰り可能な溪谷美と桜の山で有名な名所として親しまれていった。

北区の地は幕末まで江戸北郊の農村に過ぎなかったが、明治以降急速に都市化が進み、千川上水・石神井川・荒川の水利によって近代産業が開花する。日本で最初の綿紡績工場あるいは抄紙会社や印刷局抄紙工場などが石神井川下流部に相次いで建設され、王子周辺に繊維・製紙・薬品などの諸工場が集積して近代産業発祥の礎を築いた。また、西ヶ原には樹木試験場や蚕病試験場、農事試験場など農業関係の研究機関が次々に開設され、近代農業技術の中心地であった。そして、飛鳥山から西ヶ原には近代の国指定文化財が点在することもこの地の特色になっている。旧渋沢家飛鳥山邸（晩香廬・青淵文庫）・旧醸造試験所第一工場の 2 つの重要文化財（建造物）に加え、旧古河氏庭園の名勝がある。



写真6 西ヶ原貝塚



写真7 御殿前遺跡



写真8 飛鳥山1号墳



写真9 西ヶ原一里塚



写真10 旧渋沢家飛鳥山邸（晩香廬）



写真11 旧渋沢家飛鳥山邸（青淵文庫）



写真12 旧醸造試験所第一工場



写真13 旧古河氏庭園

④北区内の指定文化財

北区には、国指定文化財 8 件、国認定重要美術品 1 件、国選定保存技術保持者 1 件、東京都指定文化財 7 件、北区指定文化財 35 件、北区台帳登録文化財 11 件があり、その内訳は以下の通りである。

第 1 表 指定文化財一覧

国指定文化財

| 名称 | 区分 | | 指定年月日 |
|-------------------------------|---------|------|-------------------------|
| 西ヶ原一里塚 | 史跡 | | 大正11年3月8日 |
| 奥山峰石（喜蔵） | 重要無形文化財 | 工芸技術 | 平成7年5月31日 |
| スタンホープ印刷機 | 重要文化財 | 歴史資料 | 平成10年6月30日 |
| 中里貝塚 | 史跡 | | 平成12年9月6日 →平成24年追加指定 |
| 旧渋沢家飛鳥山邸 （晩香廬・青淵文庫） | 重要文化財 | 建造物 | 平成17年12月27日 |
| 旧古河氏庭園 | 名勝 | | 平成18年1月26日 |
| 近代教科書関係資料 内訳 教科書類、掛図、版画、版木 | 重要文化財 | 歴史資料 | 平成18年7月10日 |
| 旧醸造試験所第一工場 | 重要文化財 | 建造物 | 平成26年12月10日 |

国認定重要美術品

| 名称 | 区分 | 指定年月日 |
|---------|----|--------|
| 額面著色鬼女図 | — | 昭和9年9月 |

国選定保存技術保持者

| 名称 | 区分 | 指定年月日 |
|------|-------------|-----------|
| 小澤正実 | 選定保存技術 甲冑修理 | 平成10年6月8日 |

東京都指定文化財

| 名称 | 区分 | | 指定年月日 |
|----------------------------------|-----------------|------|--|
| 西ヶ原貝塚 | 史跡（旧 旧跡） | | 平成11年3月3日 （大正8年10月） |
| 飛鳥山碑 （旧 飛鳥山の碑） | 有形文化財 （旧 旧跡） | 古文書 | 平成8年3月18日 （大正9年3月） |
| 多紀家墓所 附 金安氏墓5基 （旧 多紀桂山一族墓） | 史跡（旧 旧跡） | | 平成23年6月9日 （昭和11年3月4日） →平成26年追加指定 |
| 王子神社のイチョウ | 天然記念物 | | 昭和14年3月 |
| 稲付城跡 | 旧跡 | | 昭和36年1月31日 |
| 中里遺跡出土丸木舟 | 有形文化財 | 考古資料 | 平成16年3月10日 |
| 田端不動坂遺跡第17地点第8号土坑 出土遺物 | 有形文化財 | 考古資料 | 平成18年3月16日 |

北区指定文化財

| 名称 | 区分 | | 指定年月日 |
|--------------------|---------|------|-------------|
| 王子田楽 | 無形民俗文化財 | 民俗芸能 | 昭和62年4月1日 |
| 御殿前遺跡 | 史跡 | | 昭和62年4月1日 |
| 『若一王子縁起』絵巻(模本) | 有形文化財 | 歴史資料 | 昭和62年6月30日 |
| 豊嶋村武藤家文書 附 複写資料 | 有形文化財 | 古文書 | 昭和63年11月14日 |
| 木造太田道灌坐像 附 厨子 | 有形文化財 | 歴史資料 | 平成元年1月25日 |
| 赤羽台第3号古墳石室 | 有形文化財 | 考古資料 | 平成元年1月25日 |

| | | | |
|---|---------|------|-------------|
| 岩井家生活用具 | 有形民俗文化財 | | 平成2年2月13日 |
| 紙本著色平塚明神并別当城官寺縁起 絵巻 | 有形文化財 | 歴史資料 | 平成3年2月22日 |
| 平塚神社文書 | 有形文化財 | 古文書 | 平成3年8月29日 |
| 十条富士塚 | 有形民俗文化財 | | 平成3年11月11日 |
| 浮間村黒田家文書 | 有形文化財 | 古文書 | 平成4年3月11日 |
| 瀧野川村芦川家文書 | 有形文化財 | 古文書 | 平成5年1月12日 |
| 静勝寺除地検地絵図・古文書 | 有形文化財 | 古文書 | 平成5年10月25日 |
| 王子村真壁家文書 | 有形文化財 | 古文書 | 平成6年4月12日 |
| 木造豊島清光坐像 | 有形文化財 | 歴史資料 | 平成6年11月22日 |
| 西蓮寺板碑群 | 有形文化財 | 歴史資料 | 平成7年7月24日 |
| 稲付の餅搗唄 附 餅搗用具一式 | 無形民俗文化財 | 民俗芸能 | 平成8年1月23日 |
| 阿弥陀三尊来迎画像夜念仏供養板碑 | 有形文化財 | 歴史資料 | 平成8年9月24日 |
| 豊島馬場遺跡出土ガラス小玉鋳型 | 有形文化財 | 考古資料 | 平成9年9月2日 |
| 赤紙仁王 (石造金剛力士立像) | 有形民俗文化財 | | 平成10年4月28日 |
| 東谷戸遺跡出土土偶 | 有形文化財 | 考古資料 | 平成10年10月13日 |
| 東京書籍株式会社附設教科書図書館 東書文庫 附 建築工事記録他35ミリフィルム | 有形文化財 | 建造物 | 平成11年3月9日 |
| 旧松澤家住宅 附 倉屋 | 有形文化財 | 建造物 | 平成11年3月31日 |
| 七社神社前遺跡出土鉄釧 | 有形文化財 | 考古資料 | 平成11年10月4日 |
| 田端西台通遺跡出土鉄剣およびガラス小玉 | 有形文化財 | 考古資料 | 平成12年2月8日 |
| 王子村大岡家文書 附 典籍・絵画 | 有形文化財 | 古文書 | 平成12年4月11日 |
| 木造阿弥陀如来坐像 | 有形文化財 | 彫刻 | 平成13年4月10日 |
| 中里遺跡出土縄文土器 | 有形文化財 | 考古資料 | 平成13年4月10日 |
| 熊野神社の白酒祭 (オビシヤ行事) | 無形民俗文化財 | 風俗慣習 | 平成14年4月9日 |
| 御殿前遺跡祭祀遺構出土土器 | 有形文化財 | 考古資料 | 平成14年4月9日 |
| 近藤勇と新選組隊士供養塔 | 有形文化財 | 歴史資料 | 平成15年12月10日 |
| 七社神社前遺跡土坑群出土資料 | 有形文化財 | 考古資料 | 平成15年12月10日 |
| 滝野川村榎本家文書 附 民俗資料 | 有形文化財 | 古文書 | 平成18年4月11日 |
| 田端富士三峰講祭祀具 附 関係文書 | 有形民俗文化財 | | 平成21年12月9日 |
| 高木助一郎日記 | 有形文化財 | 古文書 | 平成22年12月8日 |

北区台帳登録文化財

| 名称 | 区分 | | 指定年月日 |
|-----------------------|-------|------|-------------|
| 王子村大字豊島渡船場資料 附 箱1合 | 有形文化財 | 古文書 | 平成元年7月10日 |
| 青面金剛種子庚申待供養塔 | 有形文化財 | 歴史資料 | 平成3年7月4日 |
| 石造青面金剛立像 | 有形文化財 | 歴史資料 | 平成3年7月4日 |
| 庚申待供養石造地藏菩薩立像 | 有形文化財 | 歴史資料 | 平成4年1月13日 |
| 静勝寺近代文書 | 有形文化財 | 古文書 | 平成4年12月3日 |
| 山川城官一族墓碑群 | 有形文化財 | 歴史資料 | 平成21年10月5日 |
| 下村富田家文書 | 有形文化財 | 古文書 | 平成21年10月5日 |
| 浮間村立石(邦)家文書 | 有形文化財 | 古文書 | 平成21年10月5日 |
| 香取神社本殿 | 有形文化財 | 建造物 | 平成21年10月5日 |
| 阿夫利神社社殿 (熊野神社旧本殿) | 有形文化財 | 建造物 | 平成21年10月5日 |
| 正光寺山門 | 有形文化財 | 建造物 | 平成22年11月11日 |

(3) 社会的環境

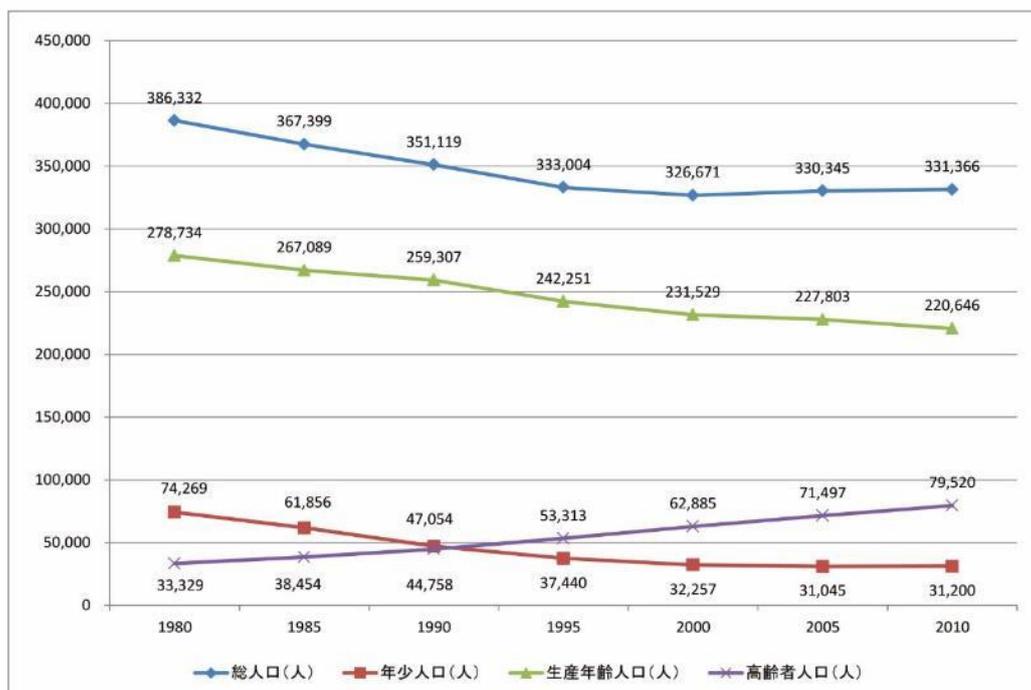
史跡中里貝塚が位置する北区は、東京都の北東部に位置し、北を埼玉県川口市と戸田市、東を荒川区と足立区、西を板橋区、南を文京区と豊島区に接している。戦後の昭和22年(1947)に、東京都が35区から23区に編成された際、旧王子区と旧滝野川区が合併し、現在の北区が誕生した。平成31年(2019)4月1日時点の人口は352,289人、世帯数は197,385世帯で、人口密度は17,093/km²となっている。人口の推移に関しては、昭和55年(1980)以降は減少傾向だったが、2000年代からゆるやかな増加傾向に転じた。

北区内の鉄道網・道路交通網は、JR線をはじめ、地下鉄やバスなど複数の公共交通機関が集まっており、都心へのアクセスが充実している。

主な路線としてJR京浜東北線、JR埼京線、JR山手線、JR宇都宮線・高崎線、JR湘南新宿ライン、東京メトロ南北線がある。



第9図 北区の鉄道網



第10図 北区の人口推移 (『北区人口ビジョン』p.2より引用)

第4節 中里貝塚の調査成果

(1) 調査研究略史

中里貝塚の存在は、江戸時代の地誌や村絵図から知ることができる。『江戸志』には、「誠に雪の降りたるが如し 遙かに遠目にも真白に見えし也」と記され、台地上から遠望した畑地に、白色化した貝殻の散布する様が雪景色さながらの光景だったことを伝えている。また、「御府内場末往還其外沿革図書」所収の村絵図には「蛎壳山」と描き込まれている。「蛎壳山」は、江戸中期まで胡粉や貝灰に牡蠣殻が使われ、そのストックヤードとして堆く集積された塚であった。

E・S・モースが明治10年(1877)に行った大森貝塚の発掘調査を契機に、考古学研究的黎明期を彩ったのは貝塚研究であった。研究を先導したのは坪井正五郎を中心とする東京人類学会であり、活動報告を掲載した学会誌には、中里貝塚は会発足当初からしばしば登場する。

中里貝塚を「中里村介塚ハ本邦考古学ニハ最枢要ナル一介塚」と評価して研究の先鞭をつけたのは、白井光太郎であった。明治19年(1886)、「中里村介塚」と題して発表し、中里貝塚が他の貝塚と異なり沖積地に立地し、その規模が極めて大きいことや採集遺物に縄文土器が僅少であることを逸早く指摘した。その後、気鋭の研究者が中里貝塚の性格について考察し、議論的になっていくが、中には人為的な貝塚なのか疑問視する声も聞かれた。地理学者の山崎直方は貝塚の立地について言及し、中里貝塚を「此貝塚こそ誠に迷惑千万の位置に立つものにして」と評している。

明治27年(1894)、佐藤傳蔵・鳥居龍蔵は中里貝塚を発掘調査し、成果を「武蔵(國)北豊島郡中里村貝塚取調報告」と題して3回に分けて報告した。冒頭に「本邦石器時代ノ遺跡中最モ其説明ニ困難ナルハ武蔵國北豊島郡中里村ノ貝塚ナリ」と記しているように、貝塚研究が進展する中にもあっても依然、立地と出土遺物において判然としない状況であった。中里貝塚に注目していた坪井正五郎は、近隣の台地上に所在する西ヶ原貝塚を発掘調査する傍ら佐藤・鳥居に中里貝塚の調査にあたらせたのであった。明治29年(1896)、佐藤・鳥居は最終報告で「是故ニ余等ハ中里村貝塚焼場附近ノ貝殻撒布地ハ純然タル貝塚ナリト信スルナリ」とし、遺物は僅少且つ沖積低地に立地するものの自然貝層ではないとして、縄文時代の浜辺に造られた人為的な貝塚であると結論付けた。この報告をもって議論は一定の終結を見せ、研究の対象から外れていくことになる。台



第11図 「中里貝塚ヲ飛鳥山丘続キヨリ望ミタル図」(『東京人類学会雑誌』所収)

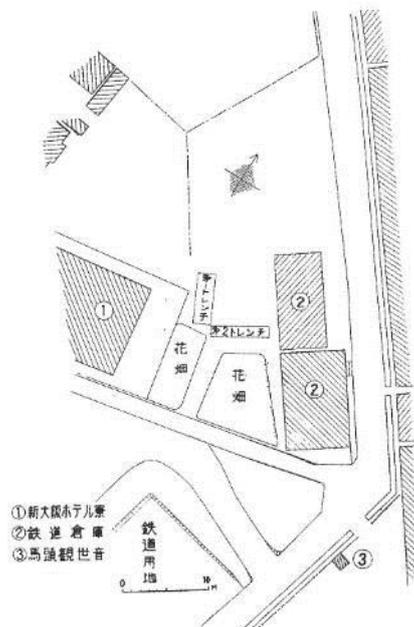
地上の貝塚に比べ縄文土器や人工遺物が出土しない中里貝塚はつまらないものに映ったのであろう。やがて貝塚周辺には操車場や駅が開設され、急速な市街化とともに貝塚は埋没し、顧みられなくなっていった。

学界では忘れ去られた観の強かった中里貝塚が再び登場するのは、昭和33年(1958)に和島誠一が行った小規模なトレンチ調査の報告であった。調査目的は、千代田区史編纂事業の一環として沖積地の陸化過程を確認するもので、学史的に著名な中里貝塚が選定された。トレンチは2.5m掘り下げたが湧水のためポンプアップが及ばず断念し、下層はボーリング調査を行っている。マガキ主体の混土貝層中から加曾利E式土器片が2点出土し、縄文時代の貝層であることを推定したが、下層は自然貝層の可能性を残したまま結論は得られなかった。

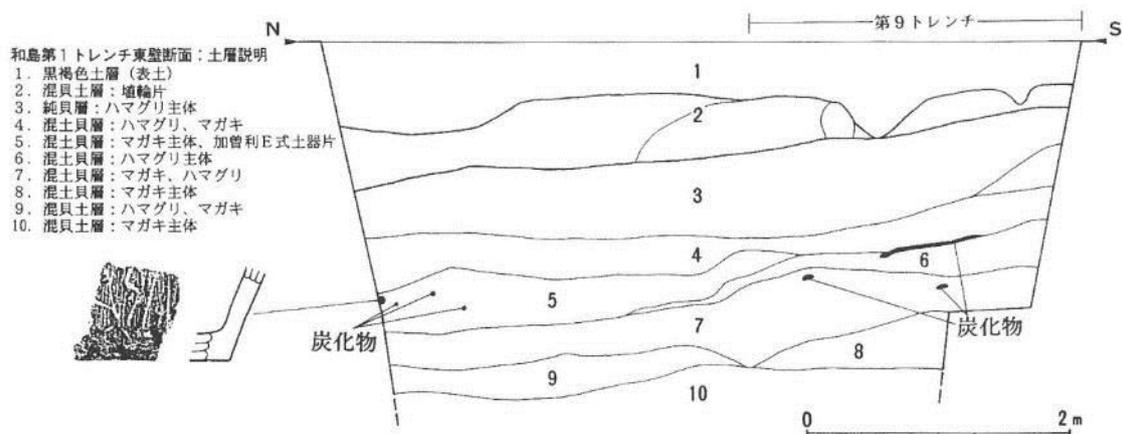
昭和58年(1983)、東北新幹線上野乗入れ工事に伴う中里遺跡が発掘調査され、縄文時代の海岸線の変遷や様々な活動の痕跡が明らかとなったが、中里貝塚の調査には至らなかった。



写真14 昭和33年トレンチ調査



第12図 トレンチ位置図



第13図 昭和33年 第1トレンチ土層図

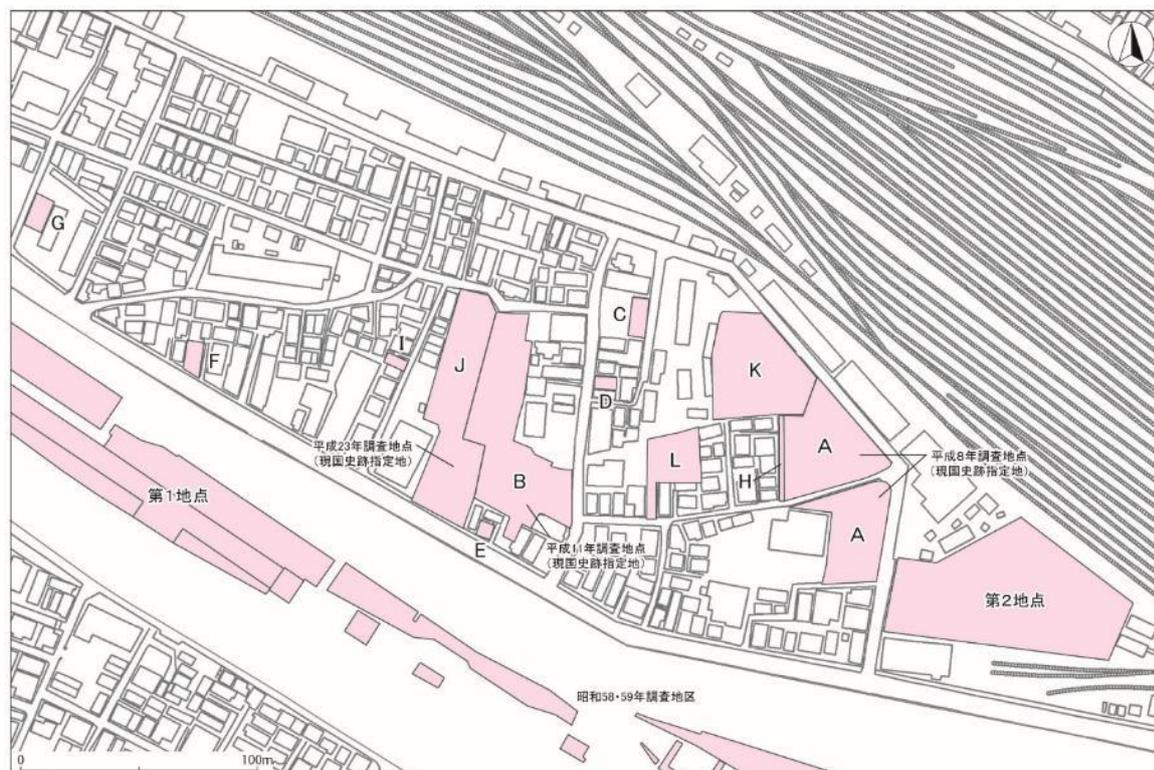
(上記の写真と図は『史跡中里貝塚 総括報告書』p.30-31より引用)

(2) 調査の概要

中里貝塚では、これまでに12地点で調査を実施し、貝層の分布範囲などを確認しているが、特徴的な遺構等が検出された2箇所（A地点・B地点）の調査成果は次の通りである。

第2表 調査地点

| 調査地点名 | 事業名 | 発掘調査期間 | 調査面積 | 調査者 |
|-------|----------|---------------------|---------|--------------|
| 第1地点 | 東北新幹線敷設 | 1983.6.27～1984.10.3 | 24,000㎡ | 東北新幹線中里遺跡調査会 |
| 第2地点 | 老人ホーム建設 | 1990.7.1～1991.1.19 | 1,700㎡ | 中里遺跡調査団 |
| A地点 | 公園整備 | 1996.7.24～11.21 | 1,100㎡ | 中里遺跡調査団 |
| | 防火水槽 | 1996.12.6～1997.1.24 | 23㎡ | 中里遺跡調査団 |
| | 学術調査(杭区) | 1996.12.6～1997.2.5 | 50㎡ | 北区教育委員会 |
| | 学術調査 | 1998.9.28～10.9 | 13㎡ | 北区教育委員会 |
| B地点 | マンション建設 | 1999.9.8～2000.1.15 | 650㎡ | 中里貝塚遺跡調査会 |
| | 確認調査(北側) | 1999.9.28～10.18 | 60㎡ | 北区教育委員会 |
| C地点 | 確認調査 | 1998.8.10～8.14 | 11㎡ | 北区教育委員会 |
| D地点 | 確認調査 | 2000.6.27・28 | 9㎡ | 北区教育委員会 |
| E地点 | 確認調査 | 1998.8.10 | 8㎡ | 北区教育委員会 |
| F地点 | 確認調査 | 2000.8.14～8.18 | 4㎡ | 北区教育委員会 |
| G地点 | LPG貯槽設置 | 2000.9.1～9.18 | 72㎡ | 中里遺跡調査会 |
| H地点 | 下水道工事 | 2000.9.27～10.4 | 31㎡ | 北区教育委員会 |
| I地点 | 確認調査 | 2000.11.10 | 2㎡ | 北区教育委員会 |
| J地点 | 確認調査 | 2011.6.20～7.25 | 281㎡ | 北区教育委員会 |
| K地点 | 確認調査 | 2014.11.25～12.5 | 85㎡ | 北区教育委員会 |
| L地点 | 確認調査 | 2015.2.12～3.6 | 47㎡ | 北区教育委員会 |

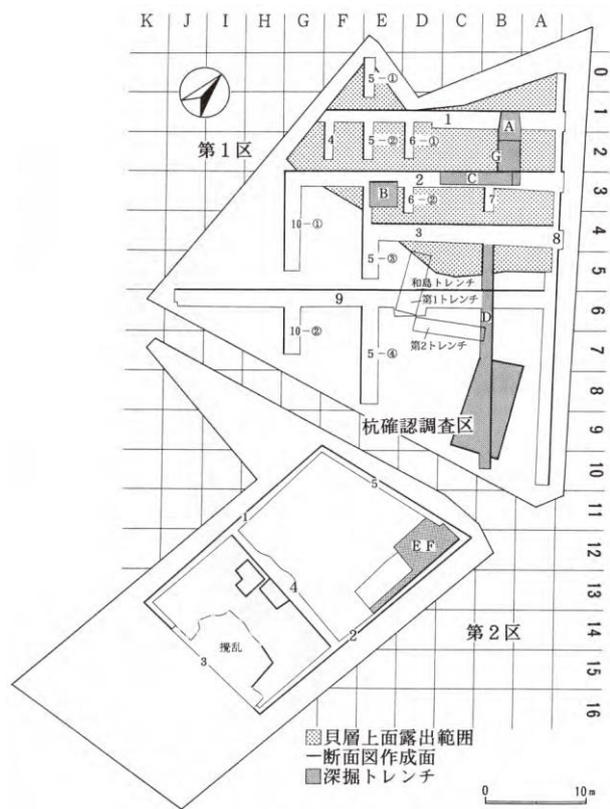


第14図 調査地点位置図（『史跡中里貝塚 総括報告書』p.34を改変）

①指定地東側（A地点）

佐藤・鳥居の最終報告から奇しくも100年後にあたる平成8年（1996）、中里貝塚は再び学界の脚光を浴びることになる。公園整備に先立つ事前調査で貝塚本体を検出し、長短10本のトレンチを設定してハマグリとマガキの純貝層を掘下げた。湧水をポンプで排水しながら部分的に深掘りし、貝層上面から深さ4.5mで洪積層の波食台（海底に相当）に達した。中里貝塚の性格を究明するため、古環境復原と貝層の詳細を把握することに重点を置き、トレンチでの断面観察に加え自然科学分析を多用する調査方針を立て、土壌試料や貝試料などを採取した。

貝層は塚状の堆積を呈し、南北幅約30～40mの塚状の高まりが東西方向に延びる。貝層の層厚や層序関係は詳細に記録化され、層厚は4.3～4.5mを最大厚とし、随所に4.0m前後を測った。層序は大きく3層に分けられ、貝層の下層はマガキ主体層、中層ではハマグリ・マガキの互層が際立ち、ハマグリを含む頻度が増す。上層はハマグリ純貝層を覆うように再びマガキが堆積している。また、標高3.5mを境に上部の貝層中には、無数の焼き火址が検出されている。



第15図 A地点の調査箇所（『史跡中里貝塚 総括報告書』p.36より引用）



写真15 マウンド状に堆積する貝塚



写真16 4.5mにも達する貝層

貝層に接する南側には、砂洲の田端微高地が形成されており、貝層と砂層は交互に重なりあって繋がっている。この砂層中からは2基の土坑が検出され、杵取りをするように枝を縁に巡らせている形状から木杵付土坑と命名された。土坑内から出土した大小の焼石やマガキのブロックは、貝を茹でるストーンボイリングあるいは蒸し焼きにすることでマガキの身を取り出した処理施設を推測させるものとなった。この方法であれば土器を用いるより多量のマガキを一度に処理することができ、しかも砂層中には同様の遺構が無数に存在している可能性が高い。木杵付土坑が使用された時期は、木材の年代測定値や付近から出土した阿玉台式土器により中期中頃に比定されている。

また、貝層下に堆積するシルト層（干潟）に杭が打ち込まれた状態で検出されている。先を加工して尖らせた杭は規則的に並んで杭列を成すが、調査範囲が限られ、その用途については解明されていない。

出土した縄文土器は、小片も含め総数81点を数え、貝層直上の確認面や包含層、木杵付土坑付近の砂層中から出土し、貝層中からは3点のみであった。時期は、貝層中や木杵付土坑付近が勝坂式期、貝層直上の確認面では加曾利E3～4式期、称名寺式期、堀之内1式期と新しくなり、加曾利E4式期の割合が高い。他には土器片錘6点や石器21点（うち敲石10点）などもあるが、明治期に指摘されたとおり通常の貝塚に比べ人工遺物は極端に少ない。



写真 17 木杵付土坑（貝蒸し遺構）



第 16 図 マガキの加工処理（『奥東京湾の貝塚文化』 p. 28 より引用）

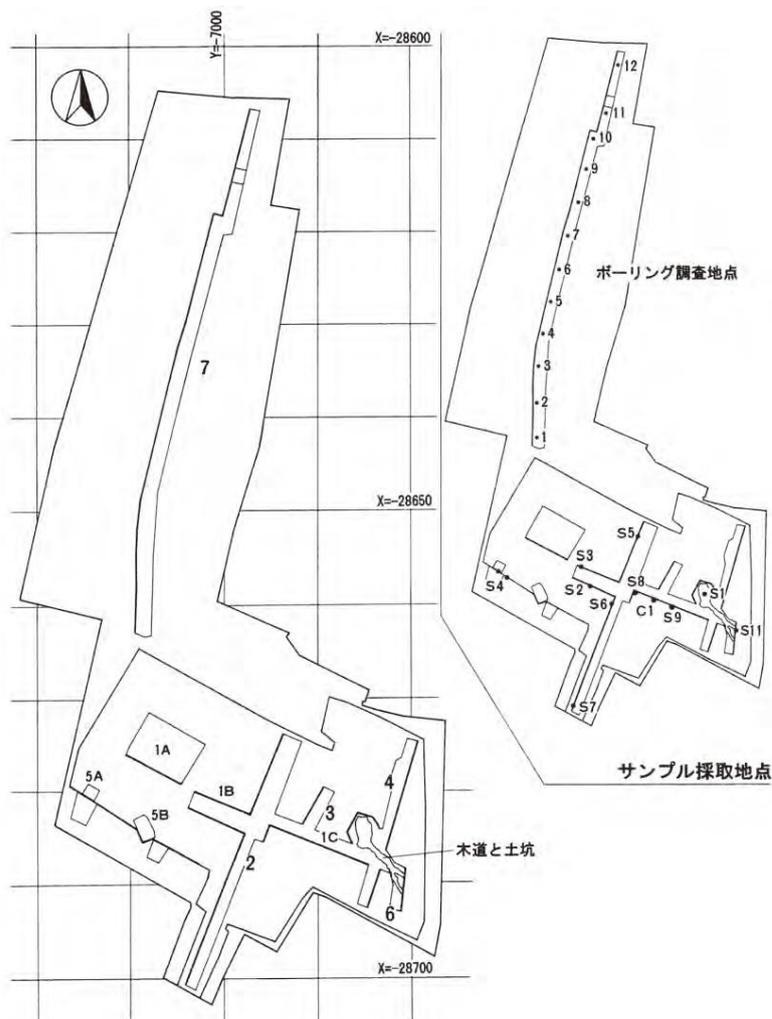
②指定地西側（B地点）

平成11年（1999）には西に100m以上も離れた地点で発掘調査の機会を得た。L字形を呈する敷地の南側650㎡を調査区として、表土掘削を始めると間もなく貝層が全面に現れた。貝層には6本のトレンチを入れて波食台まで深掘りし、平成8年調査地点と比較検討するために貝や土壌の自然科学分析試料を11地点でサンプル採取した。また、敷地の北側には範囲確認用の全長58.0mの南北トレンチを設け、貝層検出後5m間隔で12地点のボーリング調査を実施し、柱状図を作成することで南側調査区と併せ南北100m近い層序関係を把握することが可能となった。

検出されたマガキを主体とする貝層は、層厚2.0mに達し、貝層中から初めて縄文土器の個体資料が出土した。年代測定値から加曽利E式でも古段階に比定できる深鉢形土器は、貝層の形成年代を知る上でも重要な資料になっている。

そして、貝層直下の波食台上から木道と土坑が発見された。木道は、1本の丸木が半截された状態で、波食台に形成された窪みにすっぽり収まるように出土した。一部に加工痕を確認できる半截された面を上に向け、枝から根まで残存する材は6.5mを測り、調査区外にも延びるとみられる。一方、土坑は木道の根に接し、波食台を楕円形に掘り込んで造られていた。規模は南北方向の長軸が3.2m、短軸1.7m、最深0.5mを測り、土坑内から300点を数える礫が出土している。このうち87点は軽石凝灰岩で、その特徴から土坑内に持ち込まれた人工遺物であると推定した。

木道と土坑は、両者の位置関係や出土した縄文土器11点が阿玉台式や勝坂式であることなどから、同時期に利用された遺構と捉えられよう。木道には、土坑までの通路としての足場の確保や目印であった機能を想定できるが、土坑の用途については不明な点が多い。なお、土坑内部の貝類分析から干潮時でも海水が残る潮だまり（タイドプール）であったとみられるが、海水が浸入する海岸で縄文人が何らかの活動を行っていたことに疑う余地はない。



第17図 B地点の調査箇所

（『史跡中里貝塚 総括報告書』p.59より引用）



写真 18 貝層中から出土した縄文土器



写真 19 木道

③各種分析の目的と方法

このように発掘調査によって、中里貝塚の貝層が層厚 4.5mにも達することや貝の処理施設と推定された木柵付土坑、木道や土坑など、国内初の遺構が発見されたが、膨大な量の貝層が人工であるかについては科学的に検証しなければならなかった。現場で採取された各種試料サンプルは、発掘調査終了後、目的ごとに分析作業を進めた。

貝塚形成時の古環境と人間による採貝活動の様相については、貝類遺体群の精緻な分析により検討した。その分析方法は、貝種を同定して分類・集計し、貝類組成を調べることであった。例えば、A地点の貝類遺体は、採取試料から腹足綱（巻貝類）35科73種、二枚貝綱15科24種が同定され、全97種の約8割を大きさが数mmの微小貝が占め、ハマグリやマガキなどの食用種は20種ほどに過ぎなかった。非食用種の微小貝は、遺跡内や周辺域に生息していた貝類（自然遺体）もしくはマガキなどに伴って混獲された貝類（随伴種）である。同定された貝類には、内湾の潮下帯に生息する種から陸生種まで様々な生息環境をもつ種類が混在している。これらの貝類を生息地の水域（塩分濃度）、生息深度、底質・付着基盤、生活型によって分類し、類似した生息環境をもつ種類ごとにタイプ分けをした。微小貝類など自然遺体群は、貝層の堆積環境を復原するうえで有力な手掛かりになり、層位的な変遷から多くの試料で類似するパターンの存在が判明した。

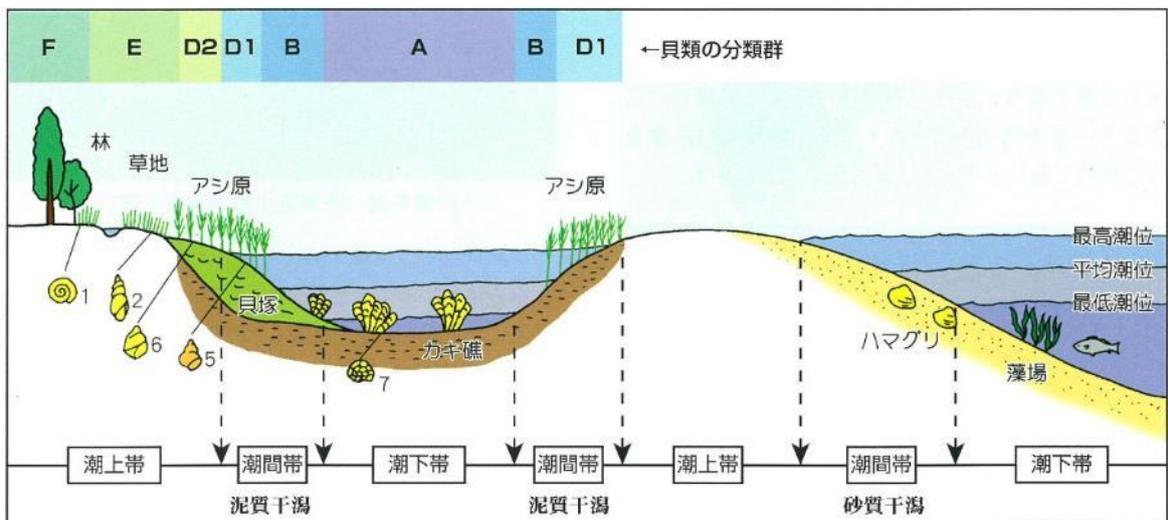
ハマグリとマガキのサイズは、殻高を測定部位として測定結果をヒストグラムで表し、殻高分布を検証した。また、ハマグリの貝殻成長線分析は、ハマグリの死亡（採貝）季節や成長速度を推定し、年齢構成を検討するのに有効である。

この他、珪藻・花粉・植物珪酸体、樹種・種実の各種自然科学分析や各種同定を行ない、堆積環境の変遷や古植生など、貝層形成時の古環境を復原した。

貝層の形成年代や遺構の構築年代に関しては、木材・炭化材・貝（マガキ）、種実、土器付着炭化物を測定試料として、放射性炭素年代測定を実施している。

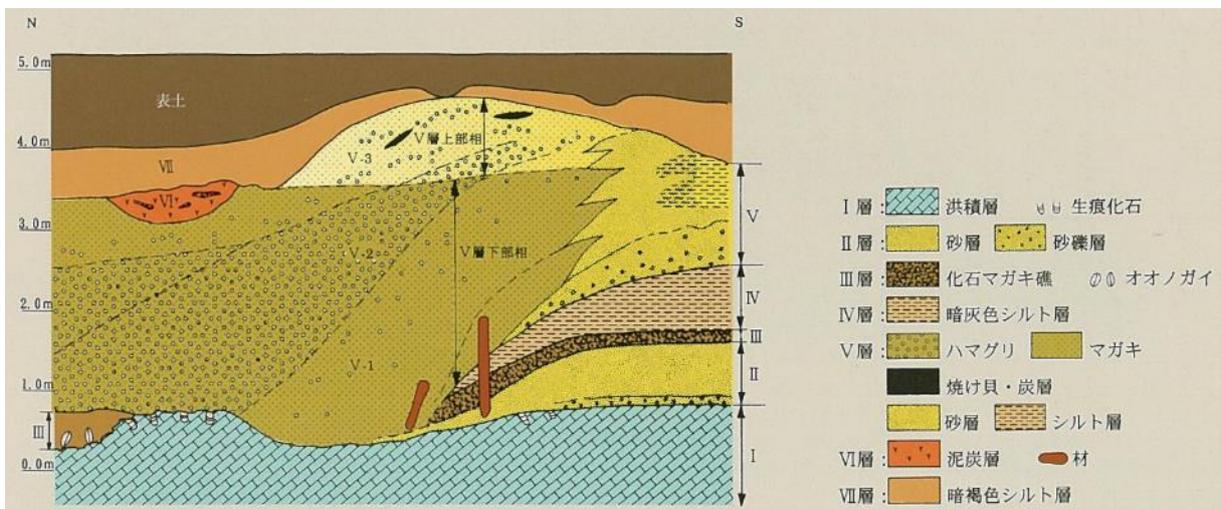


泥質干潟とアシ原（千葉県夷隅川河口干潟）



- 1.ヒメベッコウマイマイ 2.ホソオカチョウジガイ 3.キビガイ 4.クチレガイモドキの一種 5.カワザンショウガイ
6.ヨシダカワザンショウ 7.シラギクガイ 8.オオノガイ 9.ハマグリ 10.シオフキ 11.バカガイ 12.ウネナシトマヤ 13.マガキ 14.アカニシ

第 18 図 中里貝塚周辺の環境と貝類の分布（『国指定史跡 中里貝塚 2』より引用）



第 19 図 中里貝塚周辺の基本層序模式図（『奥東京湾の貝塚文化』 p. 29 より引用）

第5節 中里貝塚の歴史的価値

(1) 特化した貝類利用

貝層の規模は、江戸時代の地誌や村絵図、明治期の佐藤・鳥居報告、計12地点での貝層の確認調査を総合的に検討した結果、長さ600～700m、幅100m以上と推定した。貝層の層厚は概ね1.0～4.0mとみられ、2.0m以上の厚く堆積する範囲は、長さ600m、50～75m幅で東側はJR尾久操車場まで帯状に延びている。

検出された遺構は、貝層を除けば限られ、居住施設がない。木枠付土坑の使用時期は、貝層形成の初期段階にあたり、土坑内から出土したマガキ殻も貝層下層の貝種構成がマガキ層であることと協調的である。この処理施設でマガキの貝肉を取り出し、殻を汀線に沿って海側に廃棄し、殻は徐々に泥質干潟を埋め立てていった。周辺には同様の遺構がいくつも存在したとみられ、加工場的な空間を構成している。層厚2.0mを越すような貝層が堆積する地点で数多く検出された焼き火址も特徴的な遺構である。マガキやハマグリのような殻がかさばる貝類は、剥き身にして集落内に運搬した方が合理的であり、殻から貝肉を効率よく取り出す作業が最優先される。その剥き身処理に焼き火という単純な方法を用いたのは、土器を持ち込まずに済む簡便さと作業スペースを確保しやすいといった利便性にも優れる点である。中里貝塚で無数に確認できた焼き火址は、その場で焼き火を行なった痕跡であり、集落内の貝層で見つかる灰や炭などの廃棄ブロックとは異なる現地性の遺構である。

剥き身処理後の大量の貝殻は、泥質干潟の潮間帯に廃棄され、その堆積域の拡大は新たな活動スペースを造り出した。焼き火による処理作業は、海側に近い陸化した潮上帯の貝層上に移動して行われ、剥き身処理と廃棄が繰り返されることになる。このような作業場と捨て場は常に近接した位置関係にあり、廃棄行為と作業スペースの確保が相互関係を成している。焼き火址は、貝塚形成期間を通じて行われた剥き身処理の痕跡と推定できる。

貝類以外の動物遺体は、獣骨類は皆無、魚骨も微量であった。中里貝塚では狩猟活動は完全に欠落しており、漁労活動も採貝以外は極めて低調であったことが解明されている。

以上のように、木枠付土坑や焼き火址は土器を使用しない貝類の処理方法の存在を実証し、出土土器の稀少性を裏付けた。そして、中里貝塚は貝類利用に特化した場であり、活動の限定性が顕著と指摘できる。



写真20 貝層の検出状況

(2) 専門的な貝加工

中里貝塚で食用とした貝類は、ハマグリ・マガキ・シオフキ・バカガイ・アカニシ・ハイガイ・サルボウ・アサリ・オオノガイ・オキシジミ・ヤマトシジミなどである。貝種別の産出量は、マガキとハマグリが卓越しており、この2種が占有していた。A地点の試料サンプルでは、食用種10種の計数から組成比率を算出すると、貝層全層準がハマグリ20.1%、マガキ77.4%、中層から上層ではハマグリ73.2%、マガキ24.2%になり、いずれも2種合計で97%を超していた。貝類組成におけるハマグリとマガキの占有率の高さは、他の調査地点でも共通し、中里貝塚ではハマグリとマガキが選択的に採貝されていたことが明らかである。

生息域については、マガキ礁が奥まった閉鎖的な泥底域、ハマグリは開放的な内湾の砂泥底域とそれぞれに異なる。貝塚周辺には、泥質干潟とその沖合側に砂質干潟が広がる水域環境が展開していたと想定され、キャッチメント・エリア(資源調達範囲)は、貝塚付近のマガキ礁とより遠方のハマグリが棲む砂質干潟から構成されていた可能性が強い。

ハマグリ サイズ(殻高)では、計測した試料ごとの平均値やピークが35~50mm前後の範囲で推移し、40mm大の大型個体が中心であった。小型の個体がほとんど含まれない、まとまりのあるサイズ分布は規格的であり、大型個体のハマグリが選択的に採貝されている。

貝殻成長線分析の結果、ハマグリ死亡季節は春~夏前半に集中していた。また、成長速度から初期成長は遅いが、年齢を重ねても順調に成長し続ける大型タイプの成長パターンが多く、生息環境が安定していたことが解る。年齢構成をみると2歳未満の若齢個体がほとんどなく、ピークは3~5歳が多くを占めていた。

一方、マガキのサイズ(殻高)は50mm以上の個体も多いが、現代の養殖マガキに比べれば小振りである。採貝季節は、産卵時期の5~8月を除く俗にRが付く月であり、晩秋~冬季が中心になる。それはハマグリ漁と異なる季節であり、貝層中のハマグリとマガキの互層構造は、年間にハマグリとマガキを主体とした2回の採貝活動が繰り返行われていた痕跡であろう。

砂泥底群集の貝類のなかで身が大きく大量に採れ、貝肉が美味なのはハマグリとマガキである。大型個体が選択的に採貝された中里貝塚では、貝肉は干し貝に加工されたと推定している。干し貝は天日干しした乾物の一種であり、乾燥によって旨味成分が凝縮された加工品である。また、生の貝と比べてとくに消費期間を大幅に長期化できることで、持ち運びに適した保存食としての特性を有している。中里貝塚では、加工施設と貝の剥き身処理作業のなかで残滓として生じた貝層が一体で発見されたことから、中里貝塚における干し貝加工は、以下の作業工程が想定されている。

- ア. 水揚げされたマガキとハマグリは、浜辺で木枠付土坑の蒸焼きや焚き火で殻から身を取り出す
- イ. 取り出された大振りの貝肉は、海水で洗われ、その場で天日干しする
- ウ. 殻などの残滓は、前面の海岸線に廃棄する

このように中里貝塚では、特定の貝種に限定して漁期を違えて大型個体を選択的に採貝し、水揚げした浜辺で干し貝加工を専門的に行なっていた。貝層は干し貝加工の副産物であり、中里貝

塚が水産加工場跡と位置付けられる所以である。

(3) 貝塚形成と生産者集団

中里貝塚の形成過程は次の4期変遷で、形成期間を約800年間に亘るものと推定した。

| |
|-------------------------------------|
| 形成初期・・・勝坂2～3式期：約5,200～4,900年前 |
| 形成前半・・・加曾利E1～E2式期：約4,900～4,700年前 |
| 形成後半・・・加曾利E3式期：約4,700～4,500年前 |
| 終焉期・・・加曾利E4式期～称名寺1式期：約4,500～4,400年前 |

この年代観から形成期間の特徴は、形成初期ではマガキ主体の貝層形成が始まるが小規模であった。形成前半は貝層が徐々に沖合側に拡張し、加曾利E2～E3式期の形成後半にかけて最盛期を迎え、大規模になる。加曾利E4式期以降は縮小し、称名寺式期には終焉期を迎える。

中里貝塚の干し貝加工を担った生産者は、七社神社裏貝塚、御殿前遺跡、西ヶ原貝塚、東谷戸遺跡の台地上に居住する集団とみて良い。集落規模は、勝坂式期後葉～加曾利E1式期の七社神社裏貝塚では小規模であるが、次の加曾利E2～E3式期段階になると、御殿前遺跡を中心に西ヶ原貝塚や東谷戸遺跡にも集落規模が拡大しピークを迎え、加曾利E4式期～称名寺式期には縮小化する。台地上集落の消長は、中里貝塚の形成過程と軌を一にしていると指摘できる。

中里貝塚で行なわれた採貝、集荷、剥き身処理、干し貝加工は、各集落の集団が短期間でできる労働とは考えにくく、特定の集団が一定の約束事に基づいて組織的に関わったと推測している。

(4) 内陸部集落に供給するシステム

関東地方の大型貝塚は、環状貝塚や馬蹄形貝塚の集落に付随した貝塚である。中里貝塚の貝層は、仮に平均層厚1.5mで試算すると総体積が約92,700m³になる。加曾利南貝塚の推定総体積が5,465m³であるから桁違いの規模である。しかし、中里貝塚と最大級とされる大型貝塚には継続期間に差はなく、規模の差は消費量の大きさによるものと推測せざるを得ない。すなわち、消費者になる人口数に起因し、貝類の消費に関与した人口の多さによるものとみなせる。中里貝塚付近にこの問題を解決できるような大規模集落はなく、石神井川などの河川流域の内陸部に多数営まれた同時期の集落遺跡群がその有力な候補となる。これら集落遺跡群は、勝坂1式期に集落形成が始まり、勝坂2式期には遺跡数が増加、勝坂3式期に多くの遺跡で住居址数の一つ目のピークを迎える。次のピークは加曾利E2～E3式期にかけてであり、大規模集落で住居址数が増え、加曾利E4式期には集落数、住居址数ともに激減する。武蔵野台地上の集落形成の変遷は、勝坂式期の初期段階、加曾利E式期のピーク段階、加曾利E式期末の衰退段階に概括できる。

この動向を中里貝塚の形成期間の4期変遷に対応させると、次のように整理できる。

| |
|--|
| 形成初期・・・マガキ主体の貝層形成が始まる勝坂・阿玉台式期は、内陸部集落の遺跡数が増加し、住居址数の一つ目のピーク迎える段階に併行する。マガキが内陸部集落へ供給され始める。 |
|--|

形成前半・・・マガキの大量廃棄が進むこの段階では、内陸部集落が加曾利 E 2～E 3 式期にかけてピークを迎える大規模化への移行期に併行する。引き続きマガキが供給されるが徐々に大型のハマグリが加わる。

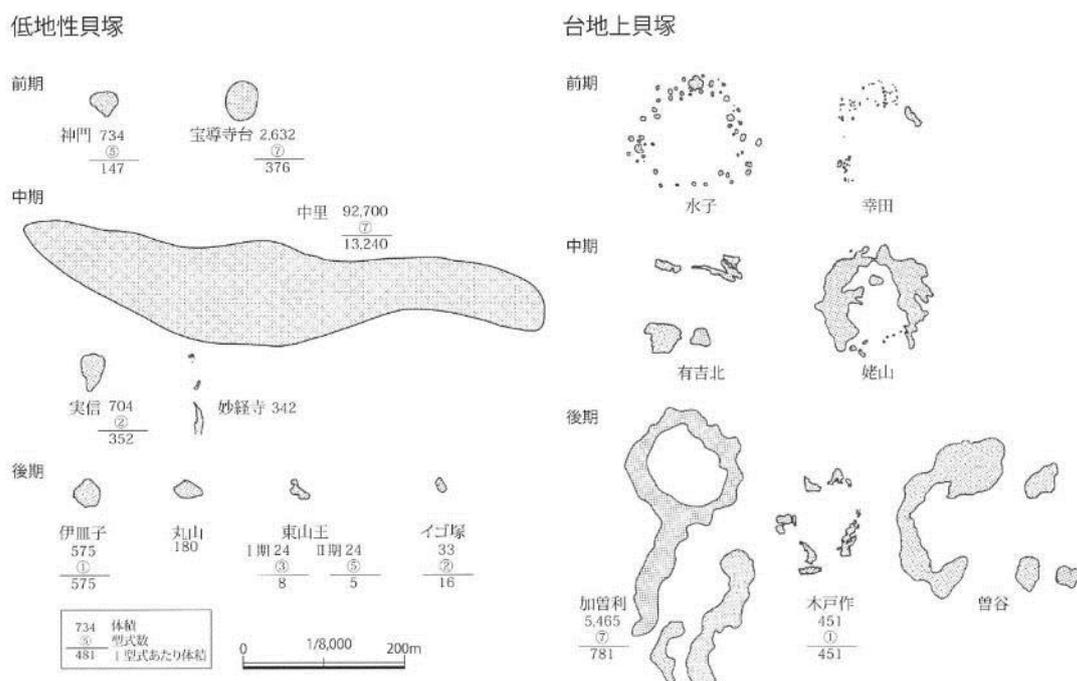
形成後半・・・ハマグリ主体貝層に変容するこの段階では、内陸部集落のピークにあたる加曾利 E 2～E 3 式期に併行する。内陸部集落のピークに伴う需要の増加がもたらした増産の必要性により、漁場の拡大と採貝対象の多様化が求められ、ハマグリの量産化が進んだ。

終焉期・・・再びマガキが主体貝層になる加曾利 E 4 式期以降では、内陸部集落の衰退段階に併行する。内陸部集落の衰退に伴う需要の低下が漁場を縮小させ、ハマグリの減産に至る。

このように内陸部集落の変遷と中里貝塚の貝層形成は連動しており、そこには生産者と消費者、言い換えれば需要と供給の関係性が成立するとみて良い。

中里貝塚の終わりは、縄文中期の集落群の終焉とともに迎え、水産資源の流通起点は、消費地である台地を刻む河川流域の集落群の動向とよく一致する。また、中里貝塚の終焉に環境的な条件だけでなく社会的な条件、つまり広域的な遺跡間関係の変容が大きく作用していたことを示唆している。

中里貝塚と内陸部集落は、沿岸部の漁業集団と内陸部の狩猟・採集集団が地域的な分業体制を敷き、両者の間で食料物資を交換することにより、陸海の多様な資源環境を利用する広域的システムを構築していたと考えられる。中里貝塚は、こうした特定の時代に地域的背景のもとで出現した地域的な分業システムによって形成された遺跡であり、東日本に展開した定住化社会における高度な水産資源の利用形態を象徴的に示す貝塚として重要なのである。



第 20 図 貝層規模の比較 (『史跡中里貝塚 総括報告書』 p. 175 より引用)



第 21 図 中里貝塚周辺の遺跡 (『国指定史跡 中里貝塚 2』より引用)

コラム ムラ貝塚とハマ貝塚

ムラ貝塚

居住空間に付随して設けられた廃棄空間の一つであり、破損した土器や石器などの不用となった生活資材や食糧残滓などの多様な廃棄物から構成されている。

ハマ貝塚

海浜部生態系(ハマ)の管理を行い、その資源をムラとは異なる空間で加工した貝塚である。



(『奥東京湾の貝塚文化』 p. 19 より引用)

第6節 史跡指定地の状況

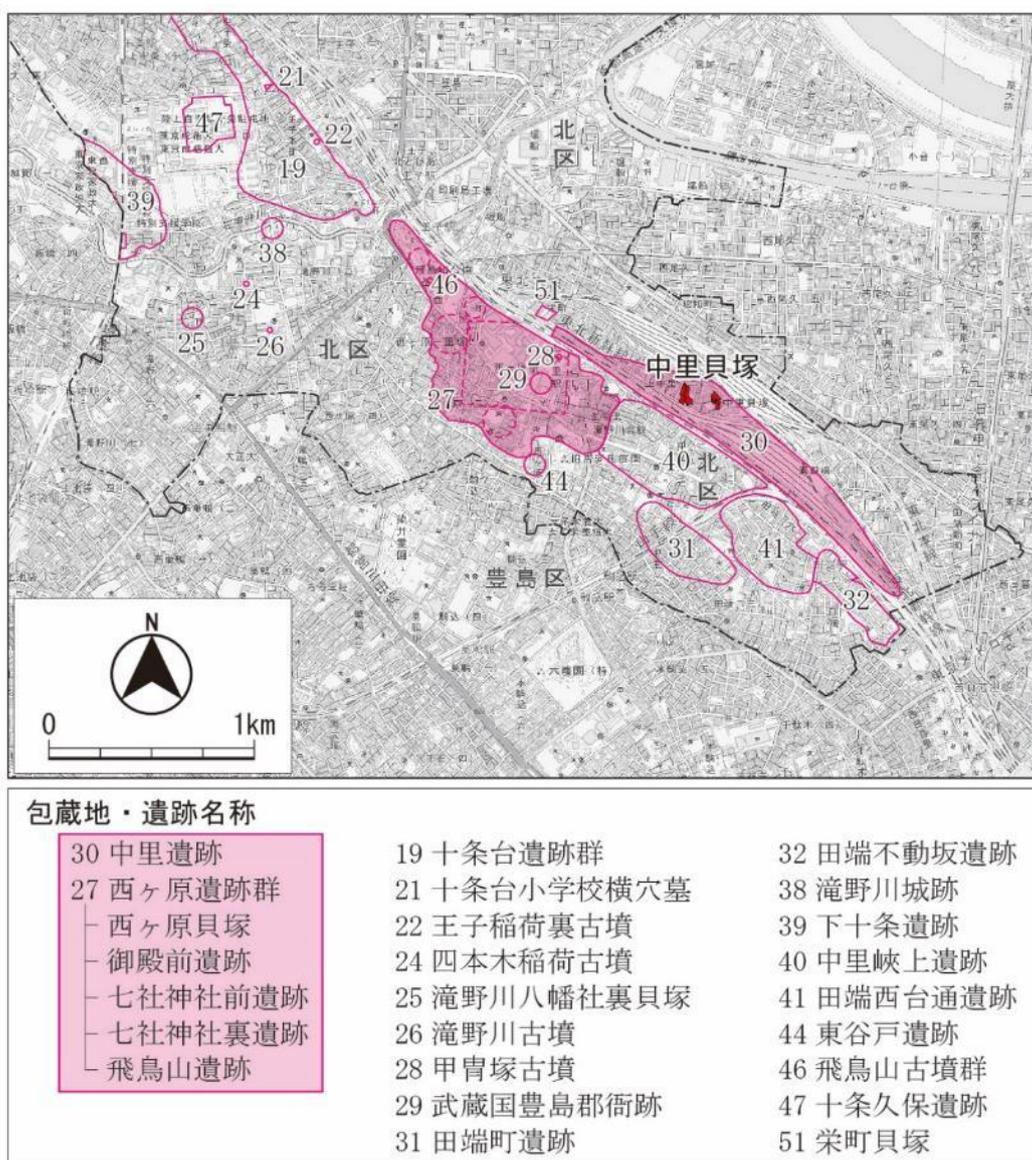
(1) 法規制

本項では、中里貝塚の史跡指定地内に関わる法規制等について整理する。

①文化財保護法（史跡指定地、周知の埋蔵文化財包蔵地）

【担当窓口：北区教育委員会事務局教育振興部飛鳥山博物館事業係】

中里貝塚は平成12年（2000）9月6日に国史跡に指定され、平成24年（2012）9月19日に西側の一部が追加指定されている。指定地内は、文化財保護法125条において「その現状を変更し、またはその保存に影響を及ぼす行為をしようとするときは、文化庁長官の許可を受けなければならない」と定められている。また、指定地周辺は文化財保護法における周知の埋蔵文化財包蔵地（中里遺跡）となっており、開発行為等により土地の掘削を行う場合には、事前の通知・届出が義務づけられている。



第22図 中里貝塚周辺の埋蔵文化財包蔵地